

Tomarigi (Vol 5)  
Anthology

Menu

羊田パン

みち

ピ-リ

彗星

双剣士

Thanks for  
reading!



# 目次

(著者名は敬称略)

表紙イラスト・本文挿絵…ピーすけ

あほのこ

著者…双剣士

3

ルカルカ○ナイトファイバー

著者…彗星

10

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における  
第1回ビンゴ大会(2014年5月3日)にて  
上位を取った方々による、合同小説本です。

Future

著者…みつちよ

20

ダイスの準備は十分か

著者…ピーすけ

26

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

やはり綾崎ハヤテの自称不幸は間違っている

著者…羊田ペンタ

32

<http://soukenshi.net/perch/>

著者あとがき & メッセージ

72

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

編集後記

76

<http://soukenshi.net/perch/sp/bingo01/>

奥付

76

## あほのこ

著者…双剣士

やつほー、こんにちはあ!!

ハヤ太くんたちのアパートに遊びに来るのも、ずいぶん久しぶりだよね!

今ではヒナちゃんやちーちゃんも一緒に住んでるんだったよね、楽しそうでいいなあ。

あはは、なんか歩ちゃんのお婆ちゃんのおうちに行つたときの皆がまた揃ってるって良いねっ♪

さあて、あのときみたいに、今日も仲良く皆で遊ぼうねっ!!

……あ、あれ?

なんで私一人だけ、ハヤ太くんの手を引っ張られてるの?

美希ちゃんや理沙ちゃんは? ねえ、ヒナちゃんたちと一緒にの部屋に私たちは行かなくていいの?

あれれ、ヒナちゃんとちーちゃんの顔がなんだか怖いんだけど? 理沙ちゃんたちが羽交い締めにされてるんだけど?

ハヤ太くん、ねえハヤ太くんってば! ぐいぐい手を引っ張ってないで、なんか言つてよお!

えっと……ここってハヤ太くんの部屋? 違うって? 屋根裏部屋には連れ込めないから空いてるお部屋を借りたんだって?

……はっ、これってひよっとして、私とハヤ太くんを二人つきりにしてくれるための秘密作戦か何か?

あ、うん、別に嫌ってわけじゃないんだけど……なんか、こういうのって気恥ずかしいって言うか……そりやハヤ太くんがその気になってくれたのは嬉しいけど、まだ陽も高いし甘いムードもないし……それよりなにより、私にだって心の準備というものがっ!!

「(どきっ)なに現実逃避してるんですか。目をしっかり開いて、現実と戦ってください!」

へ?

テーブルの上に置いてあるのって、ひよっとして聖書? ハヤ太くんはカトリック式の挙式がお望みなのか?

う……うん、分かったよ。私だって女の子、覚悟を決

めるときは決めるんだから。宗教の違いくらい乗り越えてみせるよ。虎鉄君が乗り越えようとしてる壁に比べれば、こんなのどうってことないもんね。お父さんや美希ちゃんたちに見守ってもらえないのは残念だけど、ハヤ太くんが言うなら二人つきりで聖なる誓いを……。

「いい加減にしてください！ 十一年間も毎年直面してきましたでしょ、夏休みの敵に！」

スママセンスママセン本当スママセン!!

いや……でもねハヤ太くん、自分の意思ではどうにも出来ない拒否反応ってあるんだよ？ Gとか毛虫とかストーカーとか、女の子には危険がいっぱいなんだから！ それにさ、せっかく楽しく遊びに来たのに、こんな冷や麦をぶっかけるようなことしなくたっていいじゃない？

「冷や麦じゃなくて冷や水です！ だいたい夏休みはもう今日一日しかないんですよ、今やらなくていつやるんですか！」

そ、それは良くない考え方だと思うよ？ あと一日し

か無いんじゃないかと、まだ一日あるって考えるべきだと思うの。心を豊かに、今あるものを大切にしないさいつてお父さん言ってたもん！ 夏休みは学校がお休みになる期間なんだから、宿題なんかより思いっきり遊ぶことを優先する方が、将来の豊かな人間性に繋がると思うんだ！

こういうのを『勝って兜の緒を締めよ』って言うんだったよね？

「……………(憤怒)……………」

……………くすん。



……………ね、ねえハヤ太くん、紅茶とか飲みたくならない？ 美味しいケーキとかも添えて、絶えず糖分を補給しながら勉強した方が、効率も上がると思うんだけど？

え？ そうやって逃げを打つだろうと思って私たちをアパートに呼んだんだって？ 余計なお菓子や遊び道具のない環境に閉じ込めないと、貴女たち三人は本気にならないからって？

……うん、それはそうなんだけどさ、でもハヤ太くんは大きな勘違いをしているよ。どんなシビアな環境におかれても、私たち三人は本気になんかならないんだから。子供の頃から十年以上の付き合いだもん、それくらい私にだって分かるよ！

だからさハヤ太くん、そんな怖い顔で睨み付けるのはやめて、いつもの私たちに戻らない？ せっかく若い男女が二人つきりで部屋の中にいるんだし、こんな険悪な雰囲気は良くないと思うんだ。人生は一度つきり、精一杯エンジンジョイすべきだと私は思うんだよ！

「そうやって一生エンジンジョイし続けるわけにはいかないんですよ」

そう？ 私は今のまんま、美希ちゃんや理沙ちゃんといつまでも仲良く一緒に居たいって思ってるよ？ ナギちゃんやヒナちゃんとも仲良しでいたいし……もちろんハヤ太くんだって、その輪の中に入って欲しいと思ってるんだけどなあ？

落第？

大丈夫、大丈夫。いままで十一年間なんとか生きてきたんだから、これからだってなんとかなるよ。春休みに

ちよつと補習を受けに来て、席に座ってれば良いだけなんだもん。へーきへーき、ノープロブレムだってば♪

「日本の成長を支えた●ニーが今の凋落ちようらくを迎えてる理由が、分かったような気がしますよ……」

チョーラク？ えへへ、ハヤ太くんも分かってきたじやない。そうそう、私たちは超楽ちようらく！ 細かいことなんか気にしないで、ハヤ太くんも一緒に楽しもう！！

……はえ？ なんだかハヤ太くん、ダークオーラが濃くなってるない？ ほらほら、ハヤ太くんにそんな表情似合わないよ、スマイルスマイル！

ほら、ことわざでも言うじやない、『笑うカドには服着たサンタさんがやってくる』って！



あ、あれ？

どうしたの、ハヤ太くん？ 糸が切れたみたいに座り込んで、深々と溜め息なんかついちゃって？

「……わかってましたよ、あのサンタの言ったことは嘘

っばちなんだって……地道にコツコツやったって幸せになんかなれないんだって……しよせん人生なんて本人の努力や真面目さなんかより、お金持ちの家に生まれるかどうかで決まるんだって……」

え……えっと、ハヤ太くん？ よくわかんないけど私の言葉で傷ついちゃった？

ごめんね、イヤなこと思い出させちゃって、ごめん……。ね、ねえ元気出して？ ハヤ太くんにそんな顔されると私も哀しいよ。

えっと、私が言うのもなんだけど……人生ってそんな、お金のあるなしだけじゃ決まらないから。お金持ちにも本当ピンキリ、ヒナちゃんや愛歌さんみたいなのも居れば私たちみたいな底辺クラスもいるから！ 別にテストの点数がどうかじゃなくて、人望というか信頼というか、そういった所も大事だと思うから！

そしてハヤ太くん、私はハヤ太くんのこと信じてるし、すっごく頼りにしてるよ？ 自信もって！

「……慰めてくれなくていいですよ。お金持ちどころか借金まみれの僕なんか、頼られたって応えることなんて

出来っこないんですから」

そ、そんなことないから！

ハヤ太くんは真面目だし優しいし、私たちの無茶なお願いにも気持ちよく応えてくれるんだから！ お金なんかどうだって良いんだよ、普段からの振る舞いというか、頼まれたことを一つ一つこなしていく姿勢というか、そういうのってなかなか出来ないことだと思うから！ あの気難し屋のナギちゃんの信頼を得てるのが何よりの証拠だって！ もちろん私たちの信頼もね！

「そうですか、コツコツ真面目にやる事って大事なんですか」

そうだよ、だからハヤ太くんは自信を持っているの！ だから……えっ？

「コツコツやるのが大事だって言いましたよね？」

……あ、あれ？ なんでもまた『夏休みの敵』の話に戻っちゃうの？ ひよっとして私、ボケッ掘った？ 泣き真似してるハヤ太くんにはメられた！？

ひどい、ずるいよハヤ太くん！ これは陰謀だよ、誘導尋問だよ！ ハヤ太くん、なんて怖ろしい子！ これはコーエーの罠だ！

「それを言うなら孔明の罠です！」



カリカリカリ……

ね、ねえハヤ太くん？ コツコツやるって確かに素敵なことだと思うけど、でも人間やつぱり向き不向きってあると思うんだよ。

あ、いや、怒らないで。私たちだってやる気が無いわけじゃないんだよ？ 夏休みが始まるときに理沙ちゃんたちと相談したんだ、今年の宿題は計画的にやろうって。

それでね、計画では宿題を1/3ずつ、三人で分担してやろうってことになったの。一人で全部やるのが当たり前なのかもしれないけど、守れない計画を立ててもしょうがないじゃない？ だからいきなりエベレスト登頂みたいなのは狙わないで、出来る範囲で少しずつ、力を合わせて取り組むことにしたんだ。それってとってても大事な

ことだよね？

……あ、うん、その1/3が終わってないことには一言では語れない複雑な事情があるんだけどね……とにかく要するに、私たちは1/3ずつ宿題をやるつもりで計画を立てたんだよ。だから最終日の今日になって宿題一冊ぜんぶやれて言われても無理だと思うの。計画外で想定外で天変地異なの。だからハヤ太くん、1/3までやったら終わりってことで、勘弁してもらえない？

「……その1/3は、どうやってやり遂げるつもりなんですか」

もちろん、ハヤ太くに教えてもらおうんだよ！ 他の二人はヒナちゃんとかーちゃんに教わるんだよ。三人寄ればモンハンの知恵って言うもんね！

「そうやって他人任せにしているから、いつまで経っても諺ひとつまともに覚えられないんですよ!!」

スママセンスママセン本当スママセン!!

で、でもさ……実際これだけの厚さの宿題を今日一日でやるかと思うと、ゴールが遠すぎて目眩めまいがしてくるん

だよ。やっぱり途中で目の目印とかご褒美というか、ちよつと頑張れば届くくらいの区切り目が必要だと思わない？ ここまでやったら美味しい紅茶とケーキにありつける、とかさ？

……いいの？ やったあ！

それじゃ1/3を適当に分けて……うん、このページまでやったら休憩ね！ 表紙と前書きと目次、そして『国語』って書かれた最初のページまで目を通しました！ うん頑張った私！ はい休憩！

「それって問題が始まるページより前ばかりじゃないですか！ それからさりげなくゴールを1/3にしてるんじゃない！」

ふひーん……。



うにゅー、ハヤ太くん、もう疲れちゃったよう。

ハヤ太くんの言うとおりで自分なりに考えて答えを書いてみたけど、一問ごとにダメ出しされて怒られちゃうんだもん。もう精神力の限界だよ。

二学期からは心を入れ替えて勉強します。授業も宿題も真面目にやります。だから今日だけ、今夜だけ。お願い助けて、ハヤ太くうくん！

「……もう、仕方ないですね。こんなことバレたらヒナギクさんに怒られるんでしょうが」

うわ……これ、ハヤ太くんの宿題帳？

文字がびっしり、挿絵もいっぱい！ 日記のページまで全部埋まってる！

すごい、尊敬しちゃうよハヤ太くん！ これがハヤ太くんの実力なんだね♪

「これ以上スパルタしても成果が出そうにないですし、時間ももう遅いですしね。新学期から真面目になるって誓ってくれるなら、これを使ってくれてもいいですよ」

誓う誓う、誓います！ 天地神明にかけて真面目な子になりますから！

わーい、やっぱりハヤ太くんは優しいなあ。ありがとうハヤ太くんありがとう。ハヤ太くんに勉強を教えてもらえて本当に良かったよ。これで夏休みの敵もばっちり



だね、この恩は一生かけて返させてもらおうよ。本当に感謝してる、大好きだよ、ハヤ太くん！

「……って、そこ、ナチュラルに僕の宿題と自分のを入れ替えない！ 名前を書き換ええない！」

……えっ、違うの？

F i n .

# ルカルカ○ナイトフイーバー

著者…彗星

二〇一四年。大晦日。

僕、綾崎ハヤテは負け犬公園を数年ぶりに訪れていた。たまたま仕事で近くを通りかかり、不意に懐かしくなったのである。

凍えそうなほど冷たい北風が吹き荒ぶなか、身を縮ませながら近くのベンチに腰を下ろした。

「ようやく仕事納めつすね。綾崎さん」

「うん。お疲れさま、佐藤君」

僕に続いてベンチに腰を下ろした彼は佐藤君。僕が昨年からはじめた職場の後輩で、高校を卒業したばかりの若者である。運動部に入っていたからか先輩への気配りも良く、勤務態度も至って真面目。文句の付け用のない、頼りになる後輩だ。

「お疲れさまです！ しかし、こう大晦日まで仕事が入ると少し嫌になりますね。……あ、さっきその自販機で買ったんですけど、いりますか？」

佐藤君は、そう言って僕に缶コーヒーを差し出した。受けとると、彼は自分の缶コーヒーを開ける。かしゆ、と乾いた音と共にゆらゆらと白い湯気が暗い夜空をへと立ち上っていった。

「いやー、やっぱ仕事終わりに飲むコーヒーは美味いっすね！」

「あはは、あと何年かしたらそれがビールに変わるよ」

「うへえ、マジっすか？ あれ、苦くて飲めたもんじやないっすよ」

ビールの味を思い出したのか顔をしかめる佐藤君を横目に、僕も受け取った缶コーヒーを開けた。同じように、ゆらゆらと白い湯気があがり、空中で掻き消える。

……ビールが苦い、か。確かに、僕も初めて飲んだ時はそう思ったはずだ。いつの間にかその苦味がクセになり、酔いを求めて飲むようになったのだろうか。

「そのうち、そうなるよ。そう感じない方が幸せなのかもしれないけど」

「そんなもんすかね……。っと、そうだ」

そう言って、何か思い出したのか佐藤君はポケットからスマートフォンを取り出した。

画面の大きい、ワンセグ付きのものである。

「うわ、もう八時じゃないっすか。もう終わっちゃったかな……」

「ん？ 今日なんかあったの？」

「いや、紅白ですよ。紅白。俺、毎年楽しみにしてて」

「ああ、なるほど。誰か最員の歌手が出るの？」

「水蓮寺ルカですよ！ 俺、子供の頃からずっとファンなんすよね」

「……ああ、水蓮寺ルカ。結構人気だよね」

「そりやもう。俺に言わせれば、平成の歌姫と言っても過言じゃないっすよ！」

生き生きとした顔で最員の歌手について語る佐藤君に、思わず笑みが洩れた。そして、それに釣られてもう数年会ってない彼女のことが思い出される。

——平成の歌姫。

そうか。彼女はもう、そうまで言われるようになったのか。

「ところで、もしかして綾崎さん、大晦日は笑ってはいけない派でした？」

「いや、ゆく年くる年派かな」

「大晦日はテレビ見ない派でしたか」

「毎年、年越すので精一杯だったからね」

「また笑えない冗談を……」

「神社とかお寺とか意外と稼ぎ時だから」

「なるほど。確かに時給は良さそうですね。……おつ、良かった。ルカ、今からですよ」

ようやく電波をキャッチしたのか、嬉しそうに報告する佐藤くん。

そして、気を使ってか「綾崎さんも聞きます？」と、取り出したイヤホンの片側を僕に差し出した。

「……じゃあ、悪いけど」

「いえいえ、お構い無く」

普段なら断つてるところだろう。

けれど、ふと気になったのだ。彼女は今どんな歌を、どんな表情で歌っているのだろうか。国民的アイドルとして成功して、何か変わったのだろうか。

イヤホンを付け、スマートフォン画面を覗き込む。最近流行りの女優が笑みを浮かべて口を開いた。

『さて、それでは歌ってもらいましょう！ 水蓮寺ルカで『僕ら、駆けゆく空へ』』

☆

——ああ、思い出した。

イヤホンから流れ込む彼女の清らかに澄んだ歌声に、僕は小さく呟いた。

ああ、そうだ。この歌だ。彼女が公開前にわざわざ聞かせてくれた歌。確か映画の主題歌にもなったと聞いた覚えがある。

——夢を追う歌。

これを初めて聞いた時、確かにそう思ったはずだ。

当時の彼女はアイドルとして、平成の歌姫としての階段を登り始めたばかりの頃。初の海外ライブも、この曲の発表したすぐ後だった。

そして、彼女のもう一つの夢。漫画家になるという夢に向かって一歩二歩と歩み始めたのも、ちょうどこの頃だった。かつての僕の主とマンガ対決なんてことをして。だから、僕は当時、この歌は彼女にピッタリの歌だと思ったのだ。

夢を追う彼女と、夢を追う歌。

素直に素敵だと思った。

この歌を歌うに相応しい人は彼女以外にいないだろうとも。

だから。だからこそ、彼女はこんな僕ごときが汚していい存在ではない。空っぽな僕が触れていいものではない。そう本気で考えていた。

彼女の清らかな歌声がすうつ、と空に消える。続いて、ミュージックも。

歌が終わったのだ。

スマートフォン画面から目を離す。

久しぶりに聞いた彼女の歌声と。パフォーマンスは、より洗練されていて。僕の心を揺さぶった。

『みんな！ ありがとうー！』

舞台上から彼女が手を振っているのだろう。大きな歓声が耳に届く。

『さて、そんなみんなにお知らせです！ 漫画家水蓮寺ルカの初単行本が全国の書店で販売中！ みんな、年が明けたら書店にダッシュだぞ（はあと）』

そこまで聞いて、イヤホンを外した。  
白い吐息が宙に浮かんで消える。

「どうでした？」  
「いや……」

言葉に詰まる。

暗い夜空を見上げて、頭をがしがしと掻きむしった。

「綾崎さん？」

「……良い歌だったよ。彼女にピッタリな、明るい曲で。結構、好きな曲だ」

「でしょ！ いや、良かった。なんなら今度、CD貸しますよ！」

彼の申し出に思わず苦笑して、少しぬるくなった缶コーヒーを煽る。

冷たい風が吹いて、頬を撫でた。

「佐藤君はさ、夢とかある？」  
「僕ですか？」

そう聞くと、彼は恥ずかしそうに目を逸らし頬を掻いた。

「僕は……うん。ありますよ」  
「へえ、どんな？」

「いや、お金貯めて大学行こうかなって。それで、先生になるのが夢なんです」

「先生か。それはまた、どうして？」

「ルカみたいにな、って言うとな変かもしれませんが、僕も誰かに夢を与えたいんです。先生になって、教え子が夢を叶えるための手助けをしたいなって……」

「なるほどね。素敵だ。……応援するよ」

「……綾崎さんは？」

彼はそう問い返した。

——夢。夢なあ……。

思考を巡らし、息を吐く。

夢なんて、何かあっただろうか。

そもそも、これまで生きてきて、夢らしい夢を描いたことがあっただろうか。

「そうだなあ……」

まさに問題はこれだった。

今も昔も、明確に未来を思い描けてない。

だから、当時の僕には眩しすぎたのだ。

夢を追う彼女が。夢を追う彼女達が。

特に彼女はそうだ。親に捨てられ、莫大な借金を背負わされ。僕と似た境遇であるのに、夜空の一等星のように自らの夢を主張する。その姿が、あまりにも僕と不釣り合いで、情けなくて。

夢もない。目標もない。ただただ、日々を無為に過ごすだけ。彼女の隣にいと、何だか僕が古ぼけて、霞んで見えた。

だから、逃げ出した。そうだろうか？

彼女の隣に居たくなくて、霞んだ自分を知りたくなくて。だから、僕は彼女から逃げ出したんだ。

彼女からだけではない。

誰も彼もが光り輝いている世界にいたくなくて、その世界そのものから逃げ出したのだ。

「——まだ」

どうにか、喉の奥から声を絞り出す。

「まだ、見つかっていないかな」

きっと僕はひどい顔をしているだろう。

苦虫を噛み潰したような、渋くて、今にも崩れそうな顔を。彼に顔を見られたくなくて、缶コーヒーを煽る。なにも流れては来ない。

「そうですか……」

「まあ、でも、これから見つけければ——」

「——あれ」

……懐かしい声でした。

続いて、からからとタイヤが回る音。

——ああ、ちくしょう。

思わず毒づく。

「ハヤテ君じゃないですか」

聖母の名を冠する女性。

初めてあった時と同じように、見る者すべてを引き込むような端正な顔つきで。

「こんなところで、何を？」

悪魔のような笑みを浮かべていた。

☆

「お久しぶりです。何年ぶりですかね」

佐藤君と別れ、マリアさんに連れられたのはとあるパーティー会場の一室だった。

賑やかなざわつきが遠くから耳に届く。

マリアさんは僕を椅子に座らせると、慣れた手つきでこぼこぼと紅茶を淹れ、僕の前に置いた。それから、僕とは反対側に座り向かい合う。

「どうでしたかね」

「そうそう。あなたが突然執事を辞めて以来ですから、七、八年前ですかね」

「……そうですね。そんなになりますか」

「あの時は大変でしたよ。ナギだけじゃなくて、ヒナギクさん達も大騒ぎで」

「……はあ」

僕はマリアさんを直視できずに、亜麻色の紅茶を眺めて相槌を打った。

マリアさんの髪色と同じだ——そんなことを、ふと思う。

「どうしたんですか、ハヤテ君。久々の再会だというのにやけに静かですね」

「ええ、まあ。嬉しくはないですから」

「あら、冷たい」

マリアさんは大袈裟に肩を竦めた。それから紅茶を一口、口に含む。

「けど、案外近くにいたんですね」

「たまたまですよ。たまたま、仕事でここらを通りかかったんです」

「なるほど。お仕事は？」

「土木関係です」

「顔に見合わずガテン系でしたか」

「丈夫なくらいが取り柄ですから」

くるり、とカップを回す。

特に意味はない。紅茶を飲む気にもなれず、手持ち無沙汰なだけだった。

「……そう言えば、見ました？」

「何をですか？」

「ルカさんですよ」

「ああ……。紅白ですか？」

「いや、そっちじゃなくて。と言うか、ほぼ毎年恒例みたいなものじゃないですか」

……どうやら、彼女は毎年紅白に出ていたらしい。紅白を見ることなんて、ここ数年無かったから気付いてなかった。

「マンガですよ。マンガ」

「……いえ、マンガはまだ」

僕の言葉に、マリアさんはずっと目を細めて紅茶を口に運んだ。こくり、とのどが鳴る。

「見たくないですか？」

「いえ、別に……」

「見たいですよね？」

僕の返事を待たずに、マリアさんは部屋の隅に置いてあったカバンから一冊の単行本を取り出した。カラフルな表紙に、ポップなタイトル。何とも彼女らしい、可愛いらしいマンガだ。

「ほら、どうですか？」

「……なにがですか？」



本を掲げ、マリアさんは僕にそう問いかけた。真意がわからず、問い返す。

「もつと良く見てくださいよ。ほら」

ずずい、と本の表紙が突き出される。

表紙に描かれているのは、金髪にツインテールの少女と燕尾服に見を包んだ幸薄そうな少年、それとメイド服を着た女性だ。

「これ……」

「はいダメです。読みたければ、自分で買ってくださ  
いねー」

手に取ろうとしたところで、本はぐいっと引き戻され  
た。

伸ばした手が行く先を見失い、宙ぶらりんになって取  
り残される。

「……参ったなあ」

「働いてるんでしょう？ 自分の意志で、自分のお金で

買ったらどうですか？」

ため息を一つ。

冷めた紅茶を飲み干して席を立った。

「どちらへ？」

「帰るんですよ。家に」

「……会わないんですか？」

誰に、とは聞いてこない。

それ位、マリアさんにとっては当たり前のことなのだ  
ろう。

「いえ。ややこしくなりますから」

「……それもそうですわね」

ため息をついたのは、今度はマリアさんの方だった。  
扉を開け立ち去ろうとする僕に向かって口を開く。

「ところで」

「なんですか？」

「最後に星を見たのはいつですか？」

「……さあ？ 覚えてません」

「……今夜は星が綺麗ですよ」

返事は、扉を閉める音で十分だった。

☆

外に出ると、冷たい外気に身が震えた。

歩きながら、石を蹴る。石はころころ転がり、止まる。

追いついて、また蹴った。止まる。蹴る。止まる。蹴る。

止まる。蹴る。がすんっ。

鈍い音と衝撃がして、世界が反転する。地面が遠ざか

つて、見えなくなる。代わりに遠い空が姿を現した。

「あー、くそっ」

毒づく。

額がじんじんと痛んだ。

「全然、全然じゃないか」

暗く遠い夜空。

星なんて、数えるほどしか見えない。

何が今夜は綺麗だ。全然じゃないか。

けれど、輝く星は確かにあった。あれは何という星だったか。確か、有名な星座の一部だ。ああ、くそっ。思

い出せない。

起き上がり、頭をがしがしと搔いた。

目の前には電柱が一本。これにぶつかって、盛大にコケたらしい。

「……情けないなあ」

呟いて、のろのろと立ち上がった。

ズボンについた土埃を払う。

家に帰ろう。そして、近くの本屋を探すのだ。そこで彼女のマンガと、星座の本でも買って……

もう一度、空を見上げた。

名も知らぬ一等星は、暗く遠い夜空で美しく光り輝いていた。

了



まだ少し肌寒い3月の上旬

お花見の季節まであと一カ月をきり鼻の奥がツンとする  
ような冬の匂いから暖かく包み込むような春の匂いへ

美しい花々も少しずつ咲いてきた今日この頃

「おはよう！ハヤテくん!!」

僕の目の前には満開の桜が咲いていた

く「Future」く

執事服をきた青髪の青年が朝早くからある家の前に立っ  
ていた

3月に入ってからは暖かくなってきたがそれでも朝はま  
だ冬に戻った感があり寒く底冷えがする  
何故この青年がここにいるかと言うと・・・

「おはようございます！ヒナギクさん！」

今日は彼女さんとの大事なデートの日だったようです

「ハヤテくん、早すぎよ。まだ約束の時間まで二時間近

くあるのに・・・」

「すみません、久しぶりのデートだったので待ちきれな  
くて・・・」

「もう、別にいいけど・・・お弁当、作ろうと思ったの  
にまだ半分しかできてないわよ？」

「そうなんですか・・・それじゃあ一緒に作りませんか？」

「え？」

「二人で作ったほうが早くできますし、何よりヒナギク  
さんと少しでも一緒にいたいからです」

ヒナギクはリングゴみたいに真っ赤

「もう、バカ・・・」

ハヤテはその表情にノックアウト

「っ・・・」

ヒナギクの顔を直視できずに顔をそらした

「ほら、ハヤテくん！行きましょう？」

そんなハヤテをヒナギクは家の中に導いた

それから二人は分担して料理したので一時間もかからず  
お弁当を作り終えた

今回の目的地は都内から少し外れた山の中にある動物園  
ヒナギクは初めての動物園に目をキラキラさせている  
ハヤテも普通に来るのは初めて

「ねえ、ハヤテくん！どこから回る？」

「そうですね・・・」

広い園内を見まわすとハヤテはある看板が目に入った

『ふれあい動物広場』

ウサギやモルモットの絵が描かれた下に丸っこい字で書かれてあった

「あれなんてどうですか？」

「いいわね！早く行きましょ！！」

「あれなんてどうですか？」

ハヤテはヒナギクへ視線を向けると

「いいわね！早く行きましょ！！」

ハヤテの腕に自分の腕を絡ませながら俊敏な動きで看板の後ろにある動物王国へ

「みてみてハヤテくん！このこすつごくおとなしいわよ！」

モルモットを抱っこしながらハヤテに寄り添う

「ヒナギクさんの膝の上が居心地いいんですね」

ヒナギクの膝の上でぼーっとしているモルモットを横からなでる

「僕も寝てみたいなあ」

ぼそつとつぶやいた・・・無意識に・・・

「えっ？何かいった？」

「えっ？」

あ・・・

「いえ、なんでもないです」

にこりとほほ笑むハヤテの顔には一筋の汗（・・・さすがに恥ずかしくて言えないよ）

それから二人は一分一秒無駄にしたくないという感じで  
休む暇なく園内を歩き回った

ヤギ、ヒツジのエサやり、ペンギンのお散歩、リスザルのえさに悪戦苦闘、ハヤテと昔エサを奪い合ったライオンを見て、そのライオンの赤ちゃんを抱っこしたり・・・

楽しい時間はあっという間にすぎるもので昼食もとらないまま時刻は午後2時を回っていた

「んく！たくさん歩き回ったからおなかすいちやった」

「そうですね。この辺でお昼にしましうか」

木陰の下にさっとシートを広げると少し遅めの昼食タイム

「このたまごやきすごくおいしいです！」

ハヤテが卵焼きを食べながら絶賛

「ハヤテくんが作ったハンバーグも絶品ね！」

ヒナギクも大好物、しかも彼氏の愛情という最高のスパイス入りに舌鼓を打った

もちろん、「ハヤテくん、あーん」「え、あ、あーん」

ご馳走様でした

じつくり三十分味わってから食後の休憩

そよそよと吹く風にさわさわと揺れる葉の音は心地よい音色で眠気を誘う

「気持ちいいですね」

「そうね」

ゆったりと流れる時間に・・・

「ハヤテくん、膝枕してあげようか？」

・・・

「えっ？」

時間が止まった

「さつき、『僕もねてみたいな』って言ってたでしょ？」

「あ・・・」

(聞こえてたのか)

「ねっ？」

膝の上をとんとんと叩いて

「あ、」

ハヤテの指をつんつんする

「・・・お言葉に甘えて」

ここでやらなきや男じゃない！

「どう？」

下からヒナギクの顔を見るとヒナギクも赤くなっている  
感想を求められて・・・

「気持ちいいです」

(柔らかくていいにおいの枕だけどこれじゃ全然眠れません!!)

そんなこんなで空の色はもうすっかり茜色

「うーん！今日は楽しかった!!」

ヒナギクは背伸びをしながら笑顔でハヤテを見た

「ホントですね。あつという間でした」

「モルモットもライオンの赤ちゃんかわいかったわね」

「あのライオンには睨まれた気がしましたが・・・」

ハヤテは苦笑いしながらヒナギクを見ると・・・

「いいな・・・赤ちゃん欲しいな」

ヒナギクは無意識にそんな言葉を漏らしていた

そんな言葉にハヤテはの思考回路はフリーズ

「え……」

……ながーい沈黙

「あ……」

事の重要性にやっと気付いたらしい

「////////////////////」

空はもう日が沈んで暗くなったが二人の顔は真っ赤である

「……あのヒナギクさん」

「な、何？」

さっきの言葉もあってかヒナギクは完全に挙動不審

「もう一か所、一緒に来てほしい場所があるんです……」

「今から？」

「はい」

（お義母さん、今日夜勤で遅くなるって言ってたから大丈夫よね……）

ヒナギクは少し悩んだがハヤテともっと一緒にいたい気持ちのほうを上回った

「あんまり遅くならないならたぶん大丈夫よ」

「よかった……」

「それで、どこに行くの？」

「それは……内緒です」

「ふーん」

ヒナギクはハヤテにはハヤテの考えがあるだろうと思いきやあまり深くは考えなかった

バスを何回か乗り継いでついたのは古びたアパート

大家さんに鍵を借りて入ったのは1Kの部屋だった

窓が壊れたまま修復されておらず隙間風が入って、冷えた部屋の真ん中にはぼつんとちゃぶ台が置いてある殺風景な部屋

「ハヤテくん、ここは……？」

「ここは二年前、僕と両親が住んでいたアパートです」

ハヤテは真剣な顔で部屋を見つめたままはつきりとその言葉を口にした

「ヒナギクさんも知ってる通りですが僕は親は一億五千万の借金を残して僕の前からいなくなりました。幼いきから夜逃げばかりしていて友達もできなかつた僕には両親の存在がすべてでした。小学校からはだんだんおかしいと思いつつ始めたんですが両親以外に頼る人はいなかつたですから信じるしかなかつたんです。」

口調はすごく穏やかだった

「でも結局、信じていた人たちはみんな裏切っていつて

しまいました・・・あの時から僕の時間は止まったままなんです。あのクリスマスの日からずっと・・・」

「ハヤテくん・・・」

どんなにつらい過去があっても、忘れたい、なくしたい過去があってもなくなならない事を二人は知っている。だから・・・

「今日はあの時止まった時間を進ませるためにここに来たんです」

ハヤテはヒナギクの方を向くと笑顔を見せていた

「ヒナギクさん、お誕生日おめでとごございます」

ハヤテの両手にはいつの間にかクマのぬいぐるみが握られていた

「ありがとう・・・」

ヒナギクはクマをゆっくりと受け取り、抱きしめたとすると、胸のあたりに何か固いものが当たっている

「？」

ヒナギクはクマを両手にしっかり持つとさっきあたっていた場所をみた

それはちょうどクマの手のあたり・・・

「これは？」

クマの手には小さな箱が握られていた

ハヤテはその箱をゆっくりと開く

「!!」

そこには二つのリングが寄り添うように並んでいた

「過去は取り消せないですし今の時間もたぶん止まったままです。だからここから僕は歩き出したんです。過去にとらわれる自分から未来をしっかりと見据えることのできる自分に。でもそれは僕一人ではきつと無理だと思います。ヒナギクさん、ここから先の未来を僕と一緒に歩んでくださいませんか？」

ヒナギクは泣きながら何度もうなづいた

「ヒナギクさん」

「ハヤテくん・・・」

二人の影が月明かりに溶けて重なる

その影の上にはどこで咲いていたのか桜の花びらが静かに落ちていった



ひんすけ



## ダイスの準備は十分か

著者…ピーすけ

どこか調子っぱずれの音割れた旋律がスピーカーから響く。ドヴォルザーク作曲の交響曲第九番「新世界より」第二楽章の編曲。幼き日に刷り込まれた「遠き山に日は落ちて」の歌詞が、勝手に頭の中で再生した。

宵闇が金色に映える空を、東から順に昏い色に染め始めていた。影が何かを手招きするように、ヒトやモノの足元からぞつと長く伸びている。思わずはっと息を呑むほどに美しく、そして同時に不気味でもある。逢魔が時、火灯し頃……一日の内最も短い一時である夕さりに、わざわざ、様々な名前を過去の人々が与え給うたのは、そこから得られる印象が、余りにも多すぎたからなのかもしれない。

夕日をこうして独り眺めたのは、いつ以来だろうか。

特に最近は忙しく、こんな時間があったことさえ忘れていた気がする。校舎の窓から外を眺めていると、懐かしいような、寂しいような郷愁の念が喉元にせりあがってきて、綾崎ハヤテは青い息を漏らしてしまった。

つくづく、休日に学校なんて来るものではないと思う。人気のない学校というのは、それだけで異界めいている

というのに、加えてこの有様では、本当に別のどこかに来てしまったような錯覚にさえ陥ってしまいそうになる。光と影が同居していると、嘘と真実さえも一緒に存在しているように感じる。

窓ガラスの向こうに人の影が見える。もう少し暗くなれば、それが誰か一目で解るのだろうが、まだその人影は半透明で、人物を誰か特定するには至らない。表情も勿論見えないのだが、きつと笑っている。それは、取り繕った薄気味悪い笑みなのだろう。そう、誰何して確かめるまでもなく、ハヤテは、影が誰だか知っている。おそらくは。

逃げるように目をそらし、つかつかと一つの机の前まで歩み寄る。引き出しの中に手をつ込むと、固いモノが指先に当たる。ノート。お嬢様の忘れもの。そのはず。

シュレインガーの猫。そんな単語が全く唐突に浮かんだ。量子力学の話はやや正鵠を射ていないかもしれない。しかし、机の中のノートは、ほぼ間違いなくノートである筈なのだが、極めて天文学的な確率で、ノートではない何かである確率が同居している。取り出して、この目で確かめ、コペンハーゲン解釈によって確定するまでは、ほんの少しとはいえ、あり得ない可能性が同時に存在しているのである。

指に触れるそれが突如としてその正体を現し、ねつとりとしたなにかが、ぞぞぞ。と絡め取るように纏わりついてくる。背中を蛆虫が這い回り、何かの生臭い吐息が耳に吹き付けられる……。ぬちゃりと、舌舐めずりをする音。

自らの尾を喰らう蛇の絵が浮かぶ。恐怖によって加速された恐怖は、飽くことなく加速し、螺旋を描きながら闇の底へ底へと墜落していく。目を閉じた。何も見たくなかったのに、瞼の裏には、てらてらと粘膜にその身を輝かす釣り上げたばかりの深海魚みたいな生き物——たぶん、どくどくと露出した筋肉……のようなものが胎動しているので生き物だろう——が居た。深海魚はヒトデのそれそっくりな口をもぞもぞと動かして、指先からぞりぞりとすり潰すようにしてハヤテの肉体を、おそろくは咀嚼している。当然、そいつの口の中で自分の指がどうなっているかなんて見えない。血も出ないし、痛みもない。それが却って嫌悪感を募らせる。背後の獣が、ハヤテの首筋に浮かんだ脂汗をなめとった。指先の化け物は、まだいい。ただ、こいつだけは見てはいけない。振り返ってはいけない。彼は誰？

目をつむったまま、助けを求めないように窓を見るハヤテ。日が暮れていた。窓は鏡となって、ハヤテとその背

の獣を具に映し出す。

凄絶な笑顔でハヤテを抱いていたのは……。あれは人？ 彼は誰？ 優しげな、しかし見た目だけの笑みで僕を抱いているのは……？

その正体を具に見て取るより先に、ぶしゃりとナニカが爆ぜる厭な音がして、視界が真っ暗になった。肌にまとわりつく生暖かくヌルヌルとしたナニカ。きつと、食われたのだ。これは誰かの腹の中で、だから真っ暗で、こんなにも絶望的な気持ちになるのだと——

溶けていく。酸に溶かされて体が無くなっていく。やはり、痛みや苦しみはない。ただ何となく、死ぬのは厭だなあなんて思いつつ、闇雲に柔らかい壁に爪を立てて足掻いた。上に登れないとすぐに悟り、次はこの壁を掘り進んでやろうと、そう思った。けれども、足掻くための指がない。腕も、腹も、心臓も、助けを呼ぶための喉も。そして、ついには脳みそまで無くなって、何も考えられなくなった。残ったのは闇だった。闇を見つめる目玉だけが、いつまでも、いつまでも。混沌とした絶望だけが——

遠き山に日は落ちて。

のどかな旋律が終わり、嫋々と物悲しげな余韻だけが残る。

びっしりと汗を掻いていた。いつのまにか、机に突っ伏して寝ていたらしい。焦って時計を見たが、時間はほとんど経っていない。

経っていないと思う。どこからが夢なのか、その境目さえ曖昧で、ともするとこれもまた夢ではないかという妄想に駆られる。

手にはお嬢様のノートが握られていた。ページが開いている。中身はシニールでカオスな漫画だった。くくく。思わず苦笑する。こんな支離滅裂な物語は、ハヤテには到底思い描けるものではないからだ。

外を、見た。たぶん、眠る前より少し暗くなっている。教室の風景が、窓ガラスに映り込んで、そこにたった一人だけ、薄幸そうな少年が居る。ハヤテたちは、にっこりと笑いあった。その背には、誰も映っていない。何も映っていない。

安堵の息を吐いて、ハヤテは教室を後にする。恐怖の悪循環が去ってしまった今、ハヤテは何を恐れることもない。もとより、オカルトじみた経験は豊富な彼である。一度冷静さを取り戻してしまえば、どうということはない。むしろ、何にそこまでおびえていたのか、自身でさえ解らず、思い出して吹き出しそうになったほどだった。

ガラスの向こうの少年が、小馬鹿にしたように本人を嘲笑していた。

灯りの消えた後の教室でも、ずっと。その姿が、闇に溶けるまで。

惜しいと思う。もし誰何してくれていたなら、ただの生ぬるい夢では済ませなかったのに。

黄昏時に名を問わぬとは、今の人々も随分と自分から遠くなってしまうものだ、彼は笑う。まあ、それはそれで問題ない。ならばまたいつかきつと、また誰かの前にこうして現れよう。

大丈夫だ。だって、この世には人がこんなにも溢れ返っているのだから。

そう、次は誰にしようか。誰を喰らうてやろうか。

彼は最後の最後に口元を歪めて凄絶な笑みを浮かべると、餓えた獣のように息を荒げながら、己が住処へと……聞へと消えていく。ぬちゃりと、厭な音だけを残して。

P・S

さて、懸命な方はひよっとすると勘付かれていらつしやるかもしれないのだが、最後に窓の向こうの彼……その正体を明かそう。逢魔が時に出会ったのは真実の魔か。それとも誰でもない誰かなのか。先に結論を言うが彼は彼であり、私でもありまたこの物語を紐解いたあなた自身でもある。解りやすく説明すると、彼はあなたが聞を見つめたときに空想した誰かであり、同時にどこかで恐怖を望んでいるあなた自身なのだ。つまりところ恐怖の出自とは、その個人によってもたらされるのである。オカルトの類の恐怖は、外から与えられるのではなく、内から生まれ出るモノ。即ち、思考こそが恐怖の根幹。勘違いしないでほしいのだが、これはオカルトに対する心構えを説いているのではない。むしろその逆である。オカルトが、真に思考から来るのであれば、貴方が思っている以上にはるかに近く、どこにでもそれは存在しているということになる。テレビや小説の中ではなく、存

外簡単に、そういうモノに出会えてしまうということだ。ふとした拍子。どこか異界に迷い込んでしまったような錯覚に陥った時、すこしだけ空想を働かせてほしい。そうすれば、貴方もきっと、彼に会えるはず。会いたいのなら会えるだろうし、会いたくないなら、なおのこと会えるだろう。

ただし、出会った後のことについては、保証しかねるが。ここに記したことは、私に対する彼という存在への回答であり、冒頭でノートがノートでない確率が存在したように、妄想がそうでない可能性も孕んでいることを忘れてはならない。貴方が彼に会ってみるまで、彼が私の知っている彼か、そうでないのかは確定しないのだから。

故に、断じて念のためではあるが、貴方はしばらく、特に黄昏時に窓を見ない方が良いかもしれない、とだけは記しておく。そう、あくまで念のため。

心配ない。どうせ大丈夫だ。なにせ恐怖に通じる道は、夕暮れの窓ごときだけでは、無い。たった一つ、防衛策を知っていたところで、何も変わりはないのだから。なお、私はそこからの帰り方については知らない。解った方には、ぜひとも教えていただきたいものである。無責任とは言わないでいただきたい。それでも、私は必死

なのだ。この、どうしようもない負の螺旋から逃げられるのなら、私も誰とも知らない貴方に向けて文を誂える必要もなかったのである。

貴方は狂気の世界へ行ってみたいと妄想してしまったことが一度でもあるだろうか？ もし、貴方がそう願う、そして私を救えないというのなら、どうか一緒に、こちらで苦しもうではないか。私だけ苦しむのは余りにも不公平というモノだろう。……私が誰かって？ 先も言っただろう？ 私は彼で、彼は貴方だと。極論を言えば、私は貴方でもあるのだ。貴方の内に居る、彼なのだ。

この意味が知りたいのなら、そして、知りたくないのなら尚のこと、まずはこの本を閉じるところから始めてみよう。そこは果たして、貴方が本を読む前と、本当に同じ世界だろうか？ どこかに迷い込んでいないと保証してくれる誰かは居るだろうか？ そして、その保証してくれた誰かは、本当に貴方の知る誰かなのだろうか？ 混沌とした疑問による絶望。その螺旋迷宮への入り口に、いつ迷い込むかなど到底解らないのである。

あなたの見てきた真実が、果たしてこれからも真実であるか——今が必ず今の延長線としての未来に通じているかなど、保証のしようがないことなのだから。

◆

「ごちゃごちゃと撮影用の機材がうぞ高く積み上げられた部屋。動画研究部の部室で、怪談もどきを語り終えた綾崎ハヤテはふう、と息を吐いた。

「——とまあ、こんな雰囲気はクトウルフの本来のそれなんですがね」

瀬川泉の「クトウルフの元ネタについてストーリー仕立てで教えて」という無茶ぶりに答えていたのである。なんでも、次の動画のネタはオープニングでうー・にやーしている某クトウルフカオスアニメのMADらしい。

いわゆるグロテスクなキャラクターが横領跋扈するクトウルフ神話であるが、特に昨今の日本人はその面妖かつ明晰な頭脳を以て、本来のホラーから完全に脱線してしまっているのである。きっと日本人の使っているIMEでは、スペースキーを押した瞬間に全て「萌え」に変換されるのだろう。

だから、その大元たるクトウルフがどんなものか、興味本位で泉はハヤテに訊いたのだが……

「なんていうか……うわあ」

上手く言えないのだが、こう胸にもやもやとした気持ちの悪い蟠りが出来てしまっていた。パソコンの画面に目を戻すと、やっぱり可愛らしいキヤラクターたちがカオスな日常(?)を送っていて、例えるならば、あつあつのアイスクリームを食べているような意味不明な気分になる。

「……うわあ」

もう、うわあと言うしかなかった。

「正確にはこれはサイコホラーですけれどね。本来のクトゥルフはもっとSFチックです」

「でも、こういううねうねとかぐにやぐにやは出てくるんですよ」

「出てきますねえ」

「うわあ」

ラヴクラフトの表現しなかったものとは、全く別の方向「名状しがたい」の意味を知る羽目になった彼女は、今はもうただ呻くことしかできなかった。

うー・にゃー。

パソコンのスピーカーからは、相変わらず珍妙な唄が流れている。

今日も白皇学園は、何かが逢えて這いよる必要もないほどに混沌としていた。

「でも、即興でお話作れるなんて、ハヤ太君って本当に万能だねえ」

「そりやだつて、こんなことさして珍しくもないですし」

「へえ、ひよつとしてバイトで物書きの仕事とかもやったことあるの?」

「いえ、珍しくないのは『お話を作る』という点ではないですよ」

「……え?」

そう、今日も白皇学園は、逢えて這いよるまでもないほどに、混沌がありふれているのだった。

おわり?

## やはり綾崎ハヤテの自称不幸は間違っている

著者：羊田ペンタ

時期は夏休みも終わったころ。蒸し暑いのに外にいるのは慣れない。

そしていきなりだが言わせてもらおう。

「……どうしてこうなった！」

俺の名前は比企谷八幡。千葉に住んでいる普通の高校二年生、いやぼっちな高校二年生だったはずだ。そうだったはずなんだよ……。

しかし親に家を追い出されてしまった。や、俺は悪くないよ？なのに父さんが「お前は俺の小町と仲が良過ぎる！だから出て行け！」って意味がわからないよ。ああ、小町は俺の妹だ。マジ可愛い……いかん、小町の話を始めると脱線してしまうな。

家から追い出されただけでならまだしも高校も転校させられることになった。理由は来年、小町も同じ高校を受験するからだそうだ。どれだけ遠ざけられるんだよ、俺

は。

そしてさらに意味がわからない条件、それは東京の白皇とかいう頭いい高校に編入できたら学費くらいは出してやる、ってかんじだった。いくらなんでも無理矢理すぎじゃありませんかね？

ふ、しかし編入試験にはすでに合格済みだ。やっぱ俺は目が腐ってるのと友達がいらないのをのぞけば顔も含めて高スペックだな。その欠点は重要だとか言うなよ、おい。

……いやいやいや、そんなこと自慢してる場合じゃないでしょ。住居は？生活費は？どうしろって言うんだよ。まあバイト探してアパートでも借りるしかないよな。一応財布の中には五万円ほど入ってはいる。

「はあ、本当どうしてこうなった……」

ため息をつきながら歩く。実際そんなに簡単にいくかとはとても心配である。もうお家に帰りたいよ。歩いていると突然肩に衝撃が走る。

「いてっ！」

「！あ、すいません。お怪我はありませんか？」



下を向いて歩いていたため曲がり角から出てくる人に気づかずぶつかってしまったようだ。つーかよく俺知らない町でこんなにフラフラと歩けるな。

「いや、大丈夫だ。こっちこそ前を向いていなくて悪かった。」

よくある漫画ならこういうところでぶつかるのは大抵美少女だろう。しかし現実ではそんなことは起こりえない、そう思いながら顔を上げるとやはり普通の男だった……いやちよつと待て。やつぱ普通じゃなかった。執事のコスプレしてる。へえ、東京ってこんなただの住宅地でもコスプレしてる人いるんだあ、つていやおかしいだろ！しかもよく見たら美少年だし。おい、自称ちよつとはイケメンの俺よりかなりイケメンだろこいつ。そのくせ漫画とかになつたらこういうタイプって設定的には「不細工ではない」、程度になるんだよなあ。おかしいだろ、あれ。

「どうかしましたか？」

「いや、ただ執事のコスプレが珍しかったただけだ。悪か

ったな。」

あれ、俺さつきから、いや悪かったばっかり言ってるな。国語学年三位のくせに語彙少な過ぎるだろ。あ、そうじゃないか。語彙は豊富だけど普段会話あんまりしないからパツと思いつかないんだ。良かった。いや良くねえよ。

「そういうことでしたか。でもこれコスプレじゃなくて、僕は本当に執事をやってるんですよ。」

本物なのか。びっくりだがどう返事をしろと？聞いた俺が悪いのか。

「へえ、そうなのか。じゃあなあ。」

「はい。ではさようなら。」

ふう、なんだか疲れたな。さつきまでの不安との相乗効果で俺の精神的ダメージはもはや身体にも影響を及ぼしそうだ。簡単に言えばゴロゴロダラダラと過ごしたい。しかし帰る場所もない。ならな家賃五万円以内のアパートを先に探すか。

そんな考えを持ってフラフラしていると電柱に張り紙を見つけた。アパートの入居者募集・・・俺ってこんな運良かったけ？そんで内容は？

家賃は四万で築三十年、木造アパート、トイレあり風呂共同、六畳一間・・・執事付き？食事の準備やら掃除やら洗濯やらとにかく家事をやってくれるそうだ。執事と言われるとさっきの美少年を思い出すが、同一人物なんてこともないだろう。漫画じゃあるまいし。

とりあえず俺は興味を持ったので行って見ることにした。



来て見て思った。なんか風情があつていいな、うん。深いな。深いっていう感想の浅さはまた深いな。

「すいません、アパートを見に来たんですけど。」

とりあえずアパートの庭に居た女の人に声をかけてみた。なんか中途半端に顔知ってるやつより初対面の人の方が話しやすいよね、っていう不思議。コンビニのレジの人とかキョドらないで喋れるよ！

「ん？ああ、じゃあ大家がいる部屋まで案内しますね。」  
「お願いします。」

俺が声をかけた人は、可愛い？というより美人？・・・とりあえず美少女だった。ポニーテールの髪の色は灰色がかっている。キリッとした目とメガネで印象は大人っぽく見えるが俺の予想だとまだ高校生くらいだな。

「おいナギ、新しい住人候補が来たぞ〜」

おいおいずいぶん軽いな。こんな古い建物なんだから大家は貫禄のあるじーちゃんなんじゃねえの？怖いんじゃない？この女ここの住人っぽいけどそんな態度で大丈夫なのかよ。

「んー？家賃払ってくれるなら誰でも大歓迎だぞ〜？ハヤテえ、あとは任せた。」

「はい、お嬢様。」

結局部屋には入らなかつたけど声とチラっと見えたかんじとで、大家の正体は少女であることがわかった。マジか。大丈夫かこのアパート。あ、だから代わりに執事が

いるのかそんで出て来たハヤテと呼ばれた人物は……

「……………あー!」

さっきの執事だった。

マジかおい!めんどくさそうだな。

「あなたはさっきのぶつかっただ方ですね。これも何かの縁でしょうか。では部屋に案内しますね。」

「お、おう……………」

この感じはあれだよ。中途半端な顔見知り関係だよ。ただぶつかっただけなのに向こうはもう知り合いみたいに馴れ馴れしくしてくる。コミュ力高過ぎリア充かよ。



そんなこんなで俺はアパートを獲得することに成功した。しかしあれだ。その後すぐに知ったが、この住人は執事を除けば全員美少女じゃないか。まあ俺がハーレム展開とか期待するわけないし。つーかもう出来てるだろハーレム、執事の。

しかしまだ問題は残っている。バイトだ。バイトを見つけていない。幸いこのアパートは食事もついているから今月は問題なく過ごせる。だが来月になったら家賃を払えなくなるため追い出されてしまうだろう。そのため今月中にはバイトを見つけない。

「……………バイト見つかったても働きたくねえなあ」

おっといかん心の声が。誰かに聞かれてたら引かれるな。まあいつかはドン引きされるからそれが早まるだけか……………誰も聞いてないよね?

「君はなかなか面白い人なんだね。ところでバイト探してるのか?」

うわあ、やっぱ聞かれたか。都合の悪いことほど人は聞けるもんだよな。けどドン引きはされなかったかんじだな。

「聞いてたのか……………バイトね、探してるよ。家追い出されてきたから今月の家賃払ったらもう残り少ねえ

からな。この調子じゃ来月にはここすら追い出されるまであるぞ。」

この人は確か春風だっけ？一応この住人とは挨拶を済ませておいた。春風はこのアパートに来たときに最初に話しかけた人物だ。うん、やっぱ美少女だな、つてなに考えてんだ俺は。さっきの発言とは比べものにならないくらい自分でもドン引きだわ。なんてことを考えてると春風が俺にとって都合のいい話をしてくれた。

「バイト探してるなら私がいるアニメイトはどうかかな？この間先輩が一人よくわからないけど泣きながら辞めちやってさ。私から話してみてもいいんだけど、どうする？」

「そんなありがたい話を断るわけがない。よろしく頼むわ。」

バイトも簡単に見つかった。こっち来てからの俺は本当に都合がいいな。なんとなく怖いまである。基本的に運氣は上がったら落ちる。こりや気をつけなきゃならんな。

「はい、では転校生の比企谷くん！自己紹介よろしく！」

この学校で俺が入るクラスの担任となっている桂先生がそう言っただけに自己紹介を促した。

え、なにこれ、いきなりすぎでしょ。一応覚悟はしてたけどこの状況はやっぱ無理。それに比企谷くん自己紹介よろしくって言われてるし黒板にも名前書いてあるからもう紹介されてるじゃん俺。名前以外に紹介するほど特徴ないぞ多分。なにそれ言っただけかなしいわ。と、とりあえず期待を込められた視線もあるしなんか言わないと。気まづくなって喋るとか普段の俺ならありえんな。

「え、えと、ち、千葉県の総武高から転校してきましたひ、比企谷八幡です。よろしくお願いします。」

予想通りと言えば予想通りだが噛みまくった。ちよー恥ずかしい……。ブークスクスって笑い声が聞こえる。その笑い方隠してるつもりで隠せてないから気をつ

けてよねっ！

でもそこまで蔑みの笑いとは感じないな。まあ転校初日のやつをそこまで蔑むわけもないか。

そしてこのクラス、見渡せばあのアパートの住人がほとんどそろっている。大家の三千院とその執事である綾崎。あとは春風と剣野と桂だったか？全員いるじゃねーか！あ、一人普通人忘れてた、西なんとかさん。学校でアパートのやつらと別に関わらなきゃ関係ないといえないでもないが、綾崎なら関わろうとしてきそうであらう。

「えーっと、じゃあ比企谷くんその千桜の隣空いてるから座つといてー。んじゃ、私はお酒・・・じゃなかった色々忙しいからまたねー。」

おいあの教師今酒って言ったぞ酒って。今から飲む気か？大丈夫かよこの学校。総武高のころの担任よりまずいだろあれ。

まあとりあえず座るか。春風とは何回か話したが気楽に話せるほうだと思ふ。桂の隣とかじゃなくてよかったわ。だってあいつ怖いもん。別にになにかされたわけではないけど、なんでもできる優等生なことかあれが慎ましいところか、ちよつとしたことにも突つかかかってというよ

りツッコんでくるあたりとかどこぞの氷の女王に似てるから。や、なにもされてないから勝手に似てると思うのも悪いとは思ってるんだけどね？

「改めてよろしくね、比企谷くん。」

「おう」

くだらないことを考えていたら挨拶をされてびびった。なんというかまともに話せる女子の隣の席とかほぼ初めでだからちよつと戸惑っちゃう。

そしてこの席は教室の中心近く、んで俺は転校生。となると周辺の席の生徒から質問攻めをうけてしまう。しかも大半が女子。

「前の高校どんなかんじだったの？」

「部活とかやってた？」

「なあ、ヒキタニくんは彼女とか居たのか？」

「ヒキタニくんって意外と顔はいいんだねー！」

「目は腐っているけどな。」

あれ？思ってたんと違う・・・。質問とかそんなんじゃない。なんか罵倒が混じってるし。っーか自己紹介し

たばっかりなのにヒキタニとか言われてるし。えー、俺そんなに滑舌わるくないよな。ちよつとショック。とりあえず質問に答えるか。

「前の高校は進学校。まあ緩かったけどな。部活は変なところに強制入部させられた。彼女とかいるわけもない。友達もいないまであるからな。あとそこ、いきなり人のこと馬鹿にすんな。そんでヒキタニってなんだヒキタニって。さつき自己紹介したばっかりだろ。俺は『ひきがや』だ。」

「えー、でもー。比企谷よりヒキタニの方が言いやすいかなー？って。それに漢字もひきがやーなんて読めなかったから。」

うーんこいつは雰囲氣的にアホの子だな。しかも狙ってるのかわからないふわふわしたかんじが妙にビツクくさい。

「しかしヒキタニくん。君は本当に友達もいなかったのか？なかなか面白いのに。」

「結局ヒキタニかよ。もうそこは良いわ。友達がいなくてのはもちろん本当だ。俺が面白いかは置いておくと

して、まず話す機会そのものがなかったまであるからな。今だって転校生っていう特異な人物だから興味を持たれてるだけだ。そのうち独りになるさ。」

さつきから思ってたはいたが今日の俺はよく喋るな。転校なんて初めてだから緊張があるのか？

「まあ顔立ちがよくてもそんな顔してたらな、そりや避けられるな。」

オールバックが言う。なんだそれどっちだよ。二度目の顔は表情ってことだろうけどそれならもっと分かりやすく言えよ。不細工って言われているのかと思って傷ついちゃうだろ。つーかさつきからこのオールバック遠慮ないな、おい。

「ちよつとみんな、いくら目が腐ってるからってそんなに転校生をいじめちゃだめよ。」

ナイスフォローと言いたいとこだがお前もデイスってんじやねえか、桂。やっぱりハチマン、この人苦手。だって怖いんだもん。

「はい、それじゃ授業始めるわよー。もう座りなさい。」

気付けば先生が教室に入ってきていた。

ふと隣に目を向けると、春風は笑いを堪えていた。失礼だなおい。



そして時間は過ぎ去り放課後。俺は自分の趣味を楽しんで、この学級の生徒についてわかったことがある。ん？趣味はなにかって？そりや人間観察さ。だってやることないから仕方ないじゃねえか。本当に自己紹介直後しか人が寄ってこなかったから。なにそれ言ってる悲しいわ。このフリーズ本日二回目。なんかいも言わせんな。

ああ、そんでわかったことってのはこの学級内のに置けるスクールカースト、簡単に言えば学級内での地位、誰が偉いか誰が最底辺かということだ。そしてそれを俺なりに不等号で表してみた。

女子(綾崎含む)Ⅳ教師Ⅴ男子

え？なにこれ？自分で表しといてなんだがこれどーなのよ。教師のほうが下じゃんよ。そして綾崎っ！なぜお前だけ男子の癖に最上位にいる？このリア充がっ！観たまんま表しただけだが、なんだかもー、この学校の男子が可哀想だ。もちろん俺も。

しかし、はたから観てもいい雰囲気である学級だとも思った。まず最上位にいる女子だが、誰が頂点にいてもなくみんなが平等に近い。もう一度言おう女子みんなだ。この場合のみんなには当然綾崎以外の男子は含まれないが、女子全員が平等というだけでも素晴らしいものだと思う。大体は多くの派閥が出来てそれらでいがみ合ってるからな。

と、今日の人間観察についての考察をまとめながらバイト先のアニメイトへと歩く。アニメイトか。人は多そうだが、漫画などに囲まれた環境は理想的かもしれない。

「比企谷くん、どうせなら一緒に行かないか？」

すると春風から声が掛かる。まあ行き先も同じなんだし俺から誘ってみるかとも思ったのだが、もし拒否されとスキのショックがでかそうだからやめといた。つまり返事

は、

「ああ、そうだな。」

もちろんイエスだ。しかしこんな返答しかできないのはさすがに情けないか。

そして何を話すでもなくアニメイトまで歩いて行った。

俺レベルのぼっちだと沈黙が気まずいなんてそう思うわなくなるまでである。自己紹介のときはテンパったけど。春風も常になにか話そうとするタイプではないので気が楽だ。俺からしてみれば、気を遣って話しかけられるほうがよっぽど気まずい。

そしてバイト先に着く。さて、俺のバイト先の環境はどんなものになるのか。



バイト終了。帰路なう。隣には美少女。

バイトの感想を述べるならば、ここはいい環境だろう。

先輩方は仕事についてはしっかり教えてくれるし、アホみたいに厳しくない。それにあまり俺に対して変な方向に気を遣わない。このバイトは俺にとって心地よい時間

になりそうだ。働きたくないとか言ってたやつが今更なにを・・・ってかんじだな。

ただ春風と普通に話しているのを目撃され、その後先輩に關係を聞かれたが、それに対する春風の回答が「一緒に住んでる男の子です。」だからな。洒落にならん。すぐに「アパートが同じだけです！」って言えたから助かったものの。春風あそこじやモテてるみたいだからな、本人は気付いてないけど。きつと泣いて辞めてった人もなにかしら仕掛けて勝手に玉砕したんだろう。モテると言えばリア充綾崎がいたな。

「綾崎って高校生から見たら段違いの幸せものだよなー。周りに美少女侍らせて、かなりの人数からおモテになっ  
ていらしゃってねえ。」

「やっぱりそう見えるか？けど私は綾崎くんのことを一概に幸せだなんて呼べないと思うんだ。いや、一般的にも意見は割れるだろうね。」

はっ。そんなわけないだろ、あんなリア充。どこにも幸せと呼べない要素ないだろ。

「綾崎くんは借金をしているんだ、一億五千万ほどね。」



「ふーんなるほどね……え、なんだって？」

俺の意見は変わらないと思い、最初から聞かないつもりでいたから難聴系主人公みたいになってしまった。

「だから、一億五千万の借金があるんだよ。なんでも親が超絶ダメ人間だったらしくて。物心ついたころからずっとバイトして生活してたらしいよ。」

それは不運な……だがしかし、俺の意見は変わらん。不自由と不幸はイコールじゃないよ！とかどこぞの鎧も言ってただろ。不運もそれと同じだ。不運がなんだリア充め、爆ぜろ！

「それは大変なことだな。それでもモテモテリア充という現実には動かない。」

「でも私は綾崎くんがモテるのはそうなるべくしてそうになったと思う。綾崎くんはこれまで数多く辛いことを経験してきた。そんな痛みを知っているからこそ、自身を省みないで周りにやさしくできるんだ。だからモテる。」

すかさず春風の反論！うっかり論破されちゃうところだ

「ただだろ！まあ、あいつがただのリア充(笑)ではなく、努力と優しさがあることはわかった。が、意見を変える気はない。しかしこの討論勝てそうにない。ここは戦略的撤退だな。」

「ずいぶん熱心に綾崎のことを語るな。お前も綾崎ハーレムの一員か。」

これぐらい言えば、話はそれでいく。しかも自然に。

「そんなじゃないさ。綾崎くんのことを好いていた親友がいたんだ。それでちよつとムキになっちゃったかな。」

「そうか。」

親友がいた。つまり今は違うんだろう。ただこいつは、未だにそのことが好きなんだろうな。さっきからずっと感じる、薄っぺらなものではない雰囲気。それすらもポーカークフェイスというのであれば菩薩のようだと思うがな。

「気まづくなってしまうが、俺は別に気を遣わない。春風も気を遣わない。さっきも言ったがこれは気楽だ。こいつは人の性格を把握するのが上手いのかもしれない。バイト中に気を遣っている姿も見かけた。その人に合っ

た対応を見極めているのだろう。

そして帰宅。あれからは特に会話はしていないが、場の雰囲気は自然と元に戻っていた気がする。

「ただいまー。」

アパートの戸を開けると春風はそれが当然のようにそう言った。え？アパートって普通は自室だけがマイホームなんじゃないの？この屋敷全体がマイホームならそれはもはや共同生活だろ？いや、ここの住人は共同生活のもりでいるのか。やはり俺だけぼっちか。まあ気にしないな。

「おかえりなさい！千桜さん、比企谷さん。」

「お、おう。」

だー！そこ俺に振るとこじゃないだろ！これだからリア充は！みんな同じ思考だと思いきんでる節があるから困る。俺はリア充タイプの人間が嫌いなんだよ、察しろ。相手がただのリア充(笑)だったら簡単に拒絶できたんだが、こいつは短い時間見ていただけでもわかるほど、天

然で、普段は裏表がない。だから拒絶するのもどこか憚られる。

「綾崎くん、これから夜ご飯作ってくれないか？」

「はい、大丈夫ですよ。」

「ありがとう。じゃあね比企谷くん。」

「おう、じゃあな。」

綾崎に返事するときは詰まったのに今は詰まらなかった。やはり人のイメージというのは大きなものだった。それに今この場面で春風が、比企谷くんも一緒にどう？なんて言ってるのは八幡的にポイント高い！綾崎レベルなら言ってるさうだしな。

俺は一人、部屋へ向かう。やはり一人の時間もいいからな。



それからというもののなんの変哲もない日常がただ過ぎていた。が、学校行事が近づくと周りは騒がしくなるものだ。夏休みが終わってすぐに始まるのは、文化祭だ。そして今日はそのクラスの出し物や、役回りを決めたりす

るらしい。まあこんなみんな楽しんでむような行事は俺にはあまり関係がないがな。

「じゃあ今日は文化祭について色々決めるわよー！あーめんどうだから泉、あとは任せるわ。たまには学級委員ちよさんとして頑張りなさい。」

「えー！急に言われてもどうすればいいかわからないよ！もーしょうがないなー桂ちゃんは。」

なんだかんだ拒否しながらも引き受ける学級委員長。あのアホの子でビッチなやつが委員長だとは思ってなかったがな。しかし相変わらずダメな教師だな。しかも生徒からちゃんづけ、タメ口とか。

今日の議題は俺との関連性がないため、俺はこの学級会には参加しません。その代わり寝てるから。異論は認めん。

．．．

「比企谷くんなんてどうですか。」

．．．．．は？

綾崎が何かに俺を推薦したっぽい。

なに？なんの話をしてるの？おい綾崎、俺がなにをするのがいいんだ？

「比企谷くんは転校してきたばかりで学校に馴染めてないぶん、そういった行事に積極的に参加してもらうのはいいことだと思います。学校に馴染めてないというのにそんな役割は大変かもしれないですけど、それは周りでサポートしてあげればよいと思います。」

「うーん、ヒキタニくんかー。ハヤ太くんの言ってることももつともだし、じゃあヒキタニくんが決定！次は女子だよ。大変になるかもしれないけど誰かやらない？」

なんか俺に決まったし。勝手に決めんなし。何が決まったんだよ。つーか本人に確認とらなくていいのかよ。そこ忘れるとか本当アホの子だな。いや周りも気づけよな

にやっつてんだ。

状況が全く掴めなくてキョロキョロと周囲を見回していたら春風が簡単に説明してくれた。

「今決めてたのは文化祭の実行委員だ。綾崎くんが君を推薦した。以上だ。」

本当に簡単だったな。ザツクリしすぎだろ。

「綾崎くんって頼まれてもいないことをわざわざここまでやるような人だったけ？なんか変わったかな？」

「変わったかどうかは知らんが、俺から見ればあいつはみんな仲良くってかんじにしたそうだからな。俺がクラスで浮いてるなんて勘違いしてそれを勝手にどうにかしようとしたんじゃないのか？」

「浮いてるのは事実っぽいけどね。」

「おい、それを言うんじゃないよ。」

確かに俺は一人でいるし浮いてるのかもしれない。けどそれは俺が好きでそうなってるだけだ。誰かの悪意じゃない。だから助けなんて求めてない、いや、逆に困る。やはり俺は綾崎が苦手だ。

しばらくして知ったが、綾崎の親が相当なダメ人間だったせいで、あいつも昔はハブだったらしい。



放課後。いつもは非常に放課後になると嬉しいものだが今日は気が重い。実行委員会があるからだ。実行委員会の会場となる教室に行き、クラスごとに割り当てられた席に座った。そして委員会が始まるのを待つ。待たされるくらいなら帰っていいすか？ダメっすよね。

ようやく全クラスがそろったと思えば、生徒会が司会を始めた。

「みんな忙しいなか実行委員になってくれてありがとう。生徒会長だから名前くらいは知ってると思うけど、私は桂ヒナギクです。これから文化祭までよろしくね！」

あいつは生徒会長だったか。クラスでのたまに見せる統率力はその影響もあるか。

「じゃあ最初に、文化祭実行委員会の役員を決めようと

思うの。では文化祭実行委員長をやりたい人はいませんか？こういうときは積極的に立候補してくれたほうが助かるのだけれど。」

まだ誰も手を挙げない。もちろん俺も手を挙げてはいない。俺はもとからやる気の欠片もないが、やりたいやつでもこういう場で立候補するのは難しいんだろう。

「誰かいなかしら？」

そういうセリフはプレッシャーになるんだ。察してやれよ、桂。

しかしそんなプレッシャーを誰かが押し退けてくれないと困るのも事実。そしてその人物はちゃんと現れた。

「あの・・・みんなやりたがらないなら、うち、やつてもいいですけど。」

「本当？嬉しいわ。じゃあ自己紹介してもらえるかしら？」

そいつは顔をみたことがないから多分違うクラスのやつだろう。あれ？同じクラスの委員の顔も委員決めまで知

らなかつたか。

「二年の相模南です。こういうの興味あったし、うちもこの文化祭を通して成長したいっていうか・・・。あんまり前に出るの得意じゃないんですけど、あれうちなに言ってるんだろじゃあやるなって話ですよね！あ、でも、そういうの変えたいと思うし。なんていうんですか？スキルアップのチャンスだと思うんで頑張りたいです。」

なんでこっちがお前の成長を手伝わなあかんのじゃ。と思っただが他の奴らはそうは思わなかつたようだ。

「うん。そういう自分を高めようとする姿勢はとてもいいと思うわ！」

桂までそんなこと言ってる。や、本当に自分を高めようとしてるならいいことだと思っけど、周りは巻き込むじゃねえよ、ってのが俺の考えなんだが。

俺が一人そう思っていると周りはちらほらと拍手をしていた。相模は照れ臭そうにしながら席についた。桂は立候補で決まったことが嬉しいのか小声で「よしっ！」と言っていた。生徒会書記がホワイトボードに【実行委員

長・相模南」と書いた。あれ、あの書記春風じゃん。そして桂は続ける。

「さ、あとは各役割を決めます。議事録に簡単な説明をつけておいたから読んでください。五分くらいで希望を取ります。」

言われた通り議事録に目を通す。宣伝広報、有志統制、物理管理、保健衛生、会計監査、記録雑務……。うーん、内容に見たところ全部面倒そう。が、一番楽そう。責任が軽そうな記録雑務にすることにした。

そう決めて軽く伸びをした。周りを見渡せば、携帯をいじっていたり、机に突っ伏していたり、談笑していたりとほとんどの人はもう決まっているようだ。談笑してやるやつらの中にひととき大きな声で話している、相模を中心としている三人組。特に聞くという意識を持たずとも聞こえてくる。

「うち、ノリで委員長になっちゃった〜！どうしよ〜！」  
「大丈夫だよ、できるってさがみんなら！」

「そうかな。うち、さっきめっちゃ恥ずかしいこと言った気がするんだけど。無理じゃない？」

「そんなことないって。良いこと言ってたよ？それに私たちも手伝うから。」

「そうそう！」

「本当にー！ありがとう！」

これはこれは随分仲が良さそうですね。しかしあれだな。はたから見ればなんとも空っぽな会話だな。え？そうでもないって？いや、あーいうやつらの会話ってこんなんをちよつといじれば成り立ちそうじゃん。会話のテンプレ的な？

例えば「うち、く〜のこと好きだから告白しようと思うんだけど、どうしよ〜！」「大丈夫だよ、できるって〜くなら！」みたいな。

そしてこんなテンプレ的な会話をするやつらは基本、周りの視線を気にしている。それで周りとの格付けをする。俺のクラスではそんな雰囲気になかったから少し意外、いや、そうでもないか。こういうやつらはどんなところにも大体いる。そしてそれが徐々に広まっていく。あ、こういうやつらが格差のない平穩を崩していくのか……。相模はおそらく委員長という高い地位の名を欲しがっていただけなんだろう。

「みんなそろそろ決まったかしら？じゃあここからは相模さん、よろしくね。」

「え、私？」

「うん。実行委員長としてね。任せたわよ？」

「……うん。じ、じゃあ宣伝広報やりたい人……」



全員が決め終わり、その後解散。俺は無事に記録雑務に就くことができた。しかし記録雑務は考え方が俺に似て楽そうという理由で選んだだろう人ばかりだったため積極性の墓場だ。

そして相模。とくに問題なく進めているように見えないこともなかったがほとんど、相模が詰まって桂のフォローという型の繰り返しだった。相模の顔が青くみえる。委員長というステータスを得るために立候補したあいつからしてみれば、こんなんでは逆に低く見られると、恐れているのだろう。

はあ、真面目に人間観察したから疲れた。いつもはただの暇潰しだからな。  
早く帰って寝よう。

「比企谷くん、一緒に帰らないか？」

春風に呼び止められる。毎回そんなこと言われてたら、うっかり勘違いして惚れそうになっちゃうだろ！

しかし文実の会場から出て、周りに人がいないとこまで来て声を掛けてくれるあたりが本当にありがたくて、俺のこと理解してくれてるって勘違いしちゃうそう、マジで。

「一緒に帰るのはいいんだが、いつも誘われてたらうっかり勘違いしちゃうだろ。」

「あいかわらず面白いな、君は。」

そういつて微笑む春風はどこか幼く見え、とても可愛いらしかった。が、何度も言っているが勘違いしてはいけない。後々どんな悲劇に襲われるか分からんからな。

「文実……大破しなければいいんだけどね。」

「ほう、お前もそう思ったか。さすがだな。俺の性格を一部理解できているのは伊達ではないな。」

「それほどでもないよ。それで文実の話だけど、このま

まいければヒナが全部なんとか出来る範囲内だと思うんだけどな。ちよつかいを出してきそうな人がいるんだ。だから、困ったときは頼りにしてもいいかな？」

「残念だな。あいにく俺は頼られるほど仕事もできないし、人脈もない。」

「いや、君の考え方だよ。そのへんを頼りにしてるよ。」

頼りにする、か。今まで頼られたことないし、そうだと思ったときでも使われてただけだから、その感覚はハチマンよくわかんないや。

「そうか、好きにしてくれ。」

それぐらいしか返答は思い浮かばなかった。



その後の文実は、桂がほとんど進めていた形だが仕事の進行度には問題がなかった。春風の言うとおり桂がなんとかしている。しかし、相模は桂が活躍すればするほどに覇気を失う。周りの視線も軽い蔑みの意味をもっていった。相模が望まない方向で格差はできてしまったのか

もしれない。

ある日、相模は文実に遅れてきたかと思えば突拍子もないことを言い出した。

「みんな、うちから良い案があるの！」

文実の仕事は順調に進んでるから、みんなクラスにも顔を出したほうがいいんじゃないかな！全く顔を出さないのも悪いし。」

「却下よ。今は問題がなくてもこれ以上人が少なくなるのは危険だわ。」

そらそうだ。お前はこの場をなんだと思っているんだ。ただ桂と違うことをしようとしているだけじゃないか。人と違うことをするのは目立ちたいだけだ。ソースは俺。

「いいんじゃないかしら。相模さんの言うとおりにしたほうが盛り上がりそうよね、会長。」

ニッコリと微笑みながら言う生徒会副会長の霞愛歌。同じクラスだったはずだ。そいつの笑みはどこか冷めていて、ちよつとした恐怖まで感じさせる。Sっ気があるよ



うだった。やっぱり怖い。

「うぐっ！ま、まあ愛歌さんがそう言うなら、相模さんが決めていいわ。」

ここで意外なことに桂があっさり折れてしまった。霞に弱点でも握られているのだろうか。そういえば春風が言ってたやつはこいつか。ここで相模を肯定するのはかなりまずい気がするからな。

「霞さんもこう言ってることだし、文化祭をもっと盛り上げるためにクラスにも積極的に参加しようね！何かあったら桂さんが対処してくれるよ！」

やはりまずい。今、相模は桂に対して優越感を抱いている。ずっと対抗してきた相手に形はどうであれ勝つことができたのだ。調子に乗らないわけがない。春風はこういう場面を俺が機転を効かせてどうにかしろと言っていたのだろうか。しかし展開が急すぎた。今すぐに何か考えたりはできない。おそろくこれから人はぐんと減るだろう。人間、やる理由を見つけない理由を減らさなければならぬ。最初の数人が来なくなるだけ

で、それが当たり前になるのだろう。

「ねえ比企谷くん。」

「あ？」

振り返るとそこには霞がいた。その嗜虐的な目はやめてもらえませんか怖いです。

「君、なんかわかつちやつてるかしら？この状況を。」

「いや、なんのことでしようかね？まあ人が減るのは大変だな、とは思いますが。」

おっかないから早くどっか行ってくれないかな。つーか俺なんで敬語？生存本能なの？

「わかってるくせに。比企谷くんも面白いわね。また一人からかう相手が増えてうれしいわ。」

「いや怖いこと言わんでくださいよ。つーか生徒会の身なのになんで今日こんなことしたんすか？」

「相模さんからかうため、かしら？じゃあ私も一応仕事あるから、今日はこれくらいで。また今度。」

うわあ、ただのドSだった。これからかうなんてレベルではすまないだろ。絶望しちゃうだろ。絶望を希望してるの、あのひとは？超高校級のギャルなの？・・・なわけないか。

今日は特に問題なく終わりそうだが、これからが大変そうだ。



それから数日。やはり文実に来る人は減る一方である。なにせ委員長の相模すら来てないまであるからな。休むことが当たり前にもなるのは当然だ。今は四分の一も人が来てない。さすがに桂でもこれではどうにかすることもできないようだ。つーか下っ端で仕事が少ないはずの俺にもとてつもない仕事量なのだ。来なくなったやつらはその前に、黙って俺の机に仕事を置いていったからな。しかし本当に多いかはよくわからなくなってきたまである。なぜなら記録雑務が俺一人しかおらず、比べる相手がないから。なにそれすげえ。気付かないうちにまた少数派になってる俺すごいじゃん。そしてまた気に食わないのが綾崎だ。数日前のあの件があつてから、あいつは有志の受け付けをしにきていた。

それだけならいいのが、やつはこの惨状を見て是非手伝わせてくださいと言ってきたのだ。桂なんかすんなりオーケーしちゃうしよ。それからというものの毎日ここで働いている。

そんな部外者まで働くほどの状態なわけだから桂に助け舟を出してやりたいところだが、それが出来る条件も整ってはいない。何かきっかけとなるものはないか・・・あつた！なんだこのスローガンは？ご都合展開万歳だな。これを口実に文実を全員集めることができれば、手を打てないこともない。わざわざ行動するなんて面倒だがやっつてやろうか。

「生徒会長、このスローガン大丈夫なんすか？『面白い！面白すぎる！』潮風の音が聞こえます。白皇学院文化祭〜』って。東京的にはちよつと受け入れがたい気がするんすけど。明日にでも全員招集して決め直したほうがいいんじゃないすか？」

「っ！え、ええ、そうね。私もそのスローガンは見直したほうがいいと思うわ。今まで見逃していたわ、ありがとう。」

おい桂、今なにに驚いたんだよ。俺の存在に気付いてな

かったとか、俺が自ら発言したことにびっくりしたとかそんな理由な気がするぞ？マジだったら失礼なやつだなともあれこれで明日は全員揃う。そこで行動を起こすまでだ。



一日がたった。相模に教えてやろう。桂と違う意見を出してみとめられたからと言って、お前自身が優れているようになったわけではないことを。他人より優れたように見せかけたところで自分は変わらないし、世界も変わらないということ。そして俺がこの文実という小世界を統制する手本を見せてやろう。

「相模さん、全員集まったわよ。」

「あ、うん……。えと、ではスローガンを変更したいと思いますが良い案がある人は挙手してください。」

全員というのは、文実プラス綾崎だ。部外者がカウントされてる時点でこの文実はもう狂っている。

「誰も良い案はないんですか？」

誰も手を挙げないために相模は焦っている。一時優越感に浸ったところで格の違いは変わらない。それが表面にさらけ出されるのが怖いんだろう。そしてまた桂がフオーローすることになる。

「みんな手を挙げづらいんじゃないかしら？全員に紙を配って回収したほうがいいと思うわ。じゃあみんな、今から配るからスローガンを考えて書いてね！」

手を挙げづらい、なんてお前が指摘すんじゃないよ。俺は文実初日を忘れていないぞ。

その後数分が経過し、紙は回収された。俺は提出していないが。そして回収された紙に書いてあったスローガンを書記である春風がホワイトボードに書き込んでいる。スローガン候補の中で注目を集めたものがあつた。一つは『八紘一宇』である。これは異彩を放っていたためかなり目立った。これ書いたやつはきっと旅行に辞書持っていくほどのやつなんだろうな。そしてもう一つ。『One for all』一人はみんなのために、みんなは一人のために。こんなことをスローガンに掲げるやつがいるなんてな。

「あ、これいいですね。僕ももっとみんなのために働けるようになりたいです。」

隣にいた綾崎が言った。つーかいつ隣に来たんだよ。俺でさえ気付かないほどのものとは、執事も侮れんな。神出鬼没がデフォルトなのか。

しかしこいつがそんなこと言うと、結構マジだからあまり馬鹿にすることができんる。できんるってどっちだよ。それはどうでもいいが、俺にだって意見はある。その言葉はそんなにいいもんじゃない。

「そうか？ここじゃあんま見ないがよくあることだろう？誰か一人を犠牲にしてみんなのためにそいつを傷付ける。みんなやってるだろ？」

「比企谷さん……」

ちよつと睨んできた。呆れたな意味合いが強いのだろう。今更呆れられても別に俺は気にしないが。

綾崎と会話しているうちに相模が喋り始めた。

「最後に、うちらからもひとつ案があるんだけど……」

きた！それを待っていた！今こそ俺の血の力、統制を見せてやろう！……なんかテンションおかし中二みたい。今のは自分でもないと思いました。

「うちらからは、『絆くともに助け合う文化祭』っていうのを。」

「うわぁ……」

最初からいちやもんつける気ではいたが、相模の口からそんなことを言われると思わず声が出る。

「……何かな？なんか変だった？」

どうにか笑顔を作ろうとしているが、だいぶ頭に來たらしく頬がひくついている。

「いや、別に……」

言いかけてやめる、それも文句ありげに。これが腹の立つ反応だということは明らかだ。ソースは俺。無意識にやり続けて友達いなくなつたからな。言葉にしくなくても伝わる。言葉にしくなくても意思を伝える方法を俺は知っ

ている。会話もせずに嫌われてきたからな。だからダメな方向にしか使えないが。

「何か言いたいことあるんじゃないの？」

「いや、まあ、別に。」

相模は不機嫌そうに俺を睨んで言った。

「ふーん、そう。嫌ならなんか案出してね。」

だから俺は言っただけだよ！

『人々よく見たら片方楽しってる文化祭』とか

ってね！

……世界が止まったかと思った。

誰も喋らない。まさに絶句。委員会は静まりかえり、桂でさえポカーンと口を開けていた。そんな静寂の中、春風は目を見開いて驚いており、霞はと言うと

「……ふふっ」

笑いやがった。

それで一人、目が覚めたのか桂は話しだした。

「……あ、愛歌さん。笑う場面ではないわ。」

「あら、ごめんなさい。」

「それと比企谷くん。説明を。」

半ギレっぽい桂に説明を求められた。怖いっす。

「いや、人という字は人と人が支え合って、とか言ってますけど、片方寄りかかってんじゃないっすか。誰か犠牲になるのを容認してるのが『人』って概念だと思っただけですね。だから、この文化祭に、文実に、ふさわしいんじゃないかと。」

「犠牲とは具体的に何を指すのかしら？」

「俺とか超犠牲でしょ。アホみたいに仕事させられてるし、ていうか人の仕事押し付けられてるし。それともこれが委員長言うところの『ともに助け合う』ってことなんですかね。助け合ったことがないんで俺はよく知らないんですけど。」

ここまで言っただけで周囲も再起動。ざわつき始める。俺、相模なんかには視線が集中した後、また一カ所に視線が集まる。桂だ。これまでほぼ一人で文実を引っ張っていた生徒会長がこの馬鹿な発言をどう切り捨てるのか。そんな期待だろう。

桂は・・・怖い。怒りが漏れている。そして単刀直入に、たった一言。

「比企谷くん」

「へい。」

「却っ下」

恐ろしや。その眼力だけでもうっかり気絶しちやいそう  
だ。

「相模さん」

「ひやいつ！」

「今日はこれで解散にしましょう。これでは決まらないわ。各自明日までにスローガンを考えてきてください。

それと作業に遅れが出始めているので、以降の作業も全

員参加とします。異議はないわね？」

相模までビビってたのかよ。つーかお前のその雰囲気  
で異議とか言えるやついいわ。

桂が解散と言ったため、みんなざわめきつつも帰って  
いた。

俺の予想ではここで俺に対する批判が飛び交うはずだ。  
というかあれだけやればそうなるのが当たり前だ。俺の  
イメージは、ただ自分が楽しみたいだけなの我儘なやつ。  
そんなやつと一緒にされるわけにはいかない、とみんな  
が己を鼓舞するはずだった。気付かせずに相手を操る。  
まさに幻術。

しかし、しかしだ。実際に聞こえてくるのは予想外の声。

「さっきのなんとかって人も委員長も桂さんも苦勞して  
たんだね。」

「だねー。私たちが来てなかったから。今まで迷惑かけ  
た分、もっと頑張らないと！」

「あんなに辛がってるやつがいたなんて。俺らも人任せ  
にしてばっかりじゃられないな！」

あれれー？おかしいな。なんでこんな前向きなのみんな

な？やる理由探すのが得意だったりしちゃうの？つーかこれじゃ俺が相模を論破しただけじゃん。サガミンロンパじゃん。ただ相模が悪者になってしまいう可能性もある。他のやつを悪者にしてしまつては元も子もない。

俺が困惑している中、生徒会の連中はすれ違う際に声をかけてきた。まず桂。

「はあ、君はもうちょっと根は真面目だと思つてたんだけどね。」

これはさっきの怒りはどこにもない。ただ呆れている。しかしもう見限られてしまったようだ。別に真面目じゃないからいいけど。

お次は霞。

「この学校に嫌われものは必要なのよ？狙い通りいなくて残念だったわね。」

めっちゃニヤニヤしてる。本当に俺を玩具としか思つてないかと勘違いするほどの笑みだった。違うよね？ただ狙い通りいかなかったのは事実ではあるが、桂がどさく

さに紛れて全員参加にしてくれたから結果オーライだろう。

生徒会に混じつて綾崎。

「比企谷さんは人も来ない中ずっと頑張っていましたからね。ただの愚痴だったのかもしれないですけどみなさんが真摯に受け取ってくださいってよかったですね。」

なんだかなあ。こいつの言うことを聞いていると調子が狂う。こいつはどこまで気付いているのかもよくわからない。桂は本音だと受け取ったようだし、霞なんかはよく理解していた。だがこいつはなかなか食えないやつだ。最後に春風。

「すまないね、比企谷くん。私が頼ったばかりにあんなことをさせてしまつて。まさかあんなことを言うなんて思つてなかったんだ。一歩間違えば惨いことになつたらうに。」

そういやなんで俺は自分からわざわざこんなことをしようと思つたのだろうか。行事を成功させるためなんか俺が頑張るわけもないし、みんなのためなんてのもあり

えん。じゃあなんのためだったんだ？思いあたる節があるとなれば、頼られた、ということだろう。今まで誰とも関わらず認められることもなかったのが俺だ。そんなときに初めておれを認めてくれたから頑張ろうと思えたのではないか？そうだとしたら、そのうち気づかぬうちに勘違いをしかねん。気をつけなければな。

しかし、こんなにも前向きで理想的な集団が存在するなんて思っていなかった。この学校は、俺がいままでいた場所とはちがう、小さな別世界のような。



翌日。決まったスローガンはこれだ。『白皇の名物、踊りと祭り！同じ阿呆なら踊らにや sing a song-!』  
おい。結局その方向性でいいのかよ。いやいいなら俺はいいんだけど。それと、文実は活気を取り戻していた。桂が全員参加にさせたおかげで。

「ではスローガンが決まりましたので、各自で差し替えをお願いします。」

「よし！ポスターや掲示物を書き直して貼ってこい！」

「いや待て！予算の計算がまだだ！」

「そんなこと気にしてられるか！今やるしかないだろ！」

「おい、掲示物貼り直したら画鋏しっかり回収しろよ！数えてるんだからな！」

本当にすごい活気だな。まあ仕切ってるのは桂なんだが。

「いやあ、やっぱり文実はこれが一番ですね」

とつぜん霞が呟くように、しかしよく聞こえるように言った。これはよく理解できていない者にとっては現状を高く評価しているようにしか聞こえない。しかし、心当たりのある者、負い目のある者には違うようにも聞こえる。いや違うようにしか聞こえない。つまり今の言葉は、さっきも言ったが現状を高く評価しているが、逆に言えばこれまでの状態を否定しているということだ。そしてその状態を作り出した人物そのものも否定していることになる。

「.....」



だからこんな中、相模は一人俯いているのだ。ただ蹴落とし合いをしようとしていたのだから自業自得とも言えるが、これはクラスも大事になって意見に霞が乗った所為、故意を持って乗った所為だと考えても充分だろう。そしてトドメを刺したのも霞だ。ちよつと相模が惨めに思えてきてしまった。



時はさらに飛び、文化祭二日目。

あれからというものの文実は一致団結して作業をしていた。準備は万全だった。委員長の心以外は。

文化祭のオープニングセレモニー。文化祭実行委員長からの挨拶として相模が喋ったが、それも恥ずかしいような結果に終わる。ちよつとメモを落としたり、嘔んだりしては、見ている人が笑うのも仕方がない。まあ当たり前だ。しかし負い目があるせいで、その笑いは相模にとって嘲笑でしかない。相模はもうズタボロにされている。これでは後にも響くだろう。

今、俺は何をしているかという記録の仕事だ。写真撮影。俺のことだからどうせ、盗撮と間違われて、勝手に

撮るな、とか言われると思っていたがそうでもなかった。この生徒は気前がよく、自ら写り込んでくるやつがいるまである。

「やあ、比企谷くん。仕事かい？」

「ああ。お前は生徒会なのに仕事ないのか？」

「今はちよつと休憩を貰っていてね。」

話しかけてきたのは春風。俺も最近、非生産的な会話をしようになったな。随分と堕ちたもんだ。

会話をしていると突如背中に衝撃が。

「久しぶりだね！おにーちゃん！」

「おお、小町！本当に久しぶりだな。」

「感動の再会はハグ！これは小町的にポイント高い！」

ここは海外の空港か。

あざとかったから引っpegしてやった。そのときに「あうう」とか言うのもまたあざとい。しかし、我が妹はあざとくても可愛かった。それに引き離されたのにわざわざ会いに来てくれるなんて八幡的にポイント高い！だいたい八万ポイントくらい！

「ところでお兄ちゃん、なにやってるの？」

「仕事だよ。」

首を傾げる小町。そしてもう一度。

「ところでお兄ちゃん、なにやってるの？」

「だから仕事だよ。」

さらにリピート。

「ところでお兄ちゃん、なにやって」

「お前は音飛びしたCDか。仕事だっていつてってるだろ。」

「え、うそ？本当に？あれ？なんでだろ？嬉しいはずなのになんだかお兄ちゃんが遠くに行っちゃったみたいで……」

失礼だな。何回聞いてんだよ。

「いや、実際遠いだろ。それにお前は俺の母ちゃんか。

あと俺の仕事はただの雑用だ。代わりはいくらでもいるあれだ。」

「なーんだ、それなら納得。小町も安心できるよ！」

俺ってそんな小者っぽいかな？おっと、春風が呆然としている。

「比企谷くん……そんなに喋れるのか。」

「そりゃあな。普段は喋る相手がいな……」

「お兄ちゃん！この人誰！？もしかして新しいお嫁さん候補!？」

「いやちげえよ。俺にそんなのを見つけてるスキルは今のところないからな。」

こいつ俺の嫁候補を勝手に捜しすぎだろ。それとスキルはそのうちほしいという意味を込めての、今のところ。

「はは、比企谷くんとはただ一緒に住ん……」

「言わせねえよ？」

こいつは春風、ただ同じアパートに住んでるだけだ。こいつは小町、俺の妹。」

小町相手に一緒に住んでるとか言われたらそのあと、どんな尋問を受けるかわかったもんじゃやない。

「春風千桜だ。よろしくね。」

「比企谷小町です。いつも兄がお世話になってます。ダメな兄ですけどよろしくしてやってください！」

だからお前は俺の保護者か。スペックだけ見れば俺は全然ダメじゃないんだぞ！

ここまで調子よく喋っていた小町だったが急に黙ってなにやら考えこむ。そしてまた喋りだす。

「うーん、本当はお兄ちゃんに会いに来てただけだったんだけど忙しそうだし、小町も色々見て回ってるよ！じゃあ今度お兄ちゃんの家遊びに行くからね！千桜さんもまた今度！では、お二人とも楽しんでねー！」

そう言ってスタスタと、廊下のどこかに消えて行った。

「……君とは正反対で活発な子だったな。面白いのは似てるけど。」

「はっ、小町があそこまで良い妹になったのは、俺が反面教師としてしっかり導いてやったからだと言っていい

まであるぞ。」

「あ、そうだ。そろそろ綾崎くんが有志でヴァイオリン演奏する時間じゃないか。私ちよつとそつち観たいから。じゃあ、仕事頑張つてね。」

「おう、じゃあな。」

小町のやつは、俺たちのことを二人にしようとしたのかもしれないが、残念だったな。俺の日常にそんなラブコメ展開は存在しない。

綾崎は我儘お嬢様に有志に参加するように言われたらしい。リア充も大変だな。

さて、俺は仕事を再開するかな。



文化祭も終盤。ステージでやる有志の発表も、次で最後だ。それが終わればエンディングセレモニー。この文化祭も幕を閉じる。俺は文実として、エンディングセレモニーの準備をしに体育館のステージ裏に来ていた。他の文実メンバーや生徒会も揃っている。しかしさっきから桂がせわしなく行ったり来たり、ちよつと鬱陶しい。

「ねえ比企谷くん、相模さんを見なかったかしら？」

「さあ？見てねえな。」

おっと。文化祭終了直前で最後の事件か。相模のやつ逃げたな。

「まずいな。もうすぐエンディングセレモニーが始まるのに。相模さんの仕事はあいさつと総評と、賞の発表。とくに賞の集計結果を知っているのは相模さんだけだから。」

「うーん、そうねえ。私がやりすぎちゃったのかしら？私としては相模さん自身に最後までやり通してほしいのだけれど。それなら多少は救われるでしょうし。」

「集計結果でつち上げて、代役立てればいいんじゃないか？」

「ダメに決まってるでしょ！……」

「比企谷くん……」

「それはさすがに……」

うう、言った途端にこの反応。ふざけてるわけじゃないんだしもうちよつと丁寧に扱ってよ。

「携帯とかでも連絡とれなくて……どうしましよ  
う？」

「だったら捜すしかないだろ。」

捜すと言っても時間が足りなさすぎる。

「なにかあったんですか？」

そこで現れたのは綾崎。

「相模さんがいなくて、捜さないといけないんだけど……」

「そうなんですか？では僕も捜してきますね！」

急に現れて急にいなくなった。嵐のようなやつだったな。ちよつと違うか？違うな。

「時間がないならステージでの有志発表を増やせばいい！」

「我が生徒会長に一曲歌っていただきましょう！」

「ヒナちゃん、二秒で着替えてね！」

言い終わるとすでに桂も着替え終わっていた。どうやったの？つーかこの状態で楽しんでんな、この三馬鹿は。あと三馬鹿のくせに生徒会だったのか。

「は!ちよっとだからどうやって着替えさせられてるのこれ？」

「まあ、これで時間も稼げるじゃないか。で、誰が捜しに行くんだ？」

「そんなの全員で探せば早いんじゃないの？」

「やみくもに捜したって見つかるとは思えないがな。あいつは失敗ばかりしたから逃げたんだろ？廊下に突っ立ってたりするわけがない。」

そう。捜せるとしても一カ所がいいところだろう。あいつの心理を読まなければ見つからない。

「そうだな。比企谷くん、頼めるかな？きつい仕事ばかり頼んじゃって悪いね。」

「千桜はこう言ってるけど、比企谷くんは見つけられると思う？」

「わからん、としか言いようがないな。」

「不可能とは言わないのね。だったら頼んだわよ。」

俺に拒否権はないらしい。まあ今回は断る気もなかったからいいんだが。

「おう。」

と言いながら、その場を去る。さあ相模はどこにいるのやら。

そういや綾崎も捜しに行ったんだな、忘れてたわ。

「さて、私も歌うんだし？あなたたちも三人で歌いなさいよ!」

「えっ!」

立ち去り際、こんな会話が聞こえてくるまである。楽しみすぎだろ、桂も。



相模の今の心理状況をもう一度見直そう。

あいつが文化祭実行委員長になったのは、周りから見

より高い場所に居座りたかったからだ。だが実力がなかったために仕事を果たせなかった。そして文実では自分より仕事のできる人、桂が代わりに仕事をし、周囲もそちらのほうを求めた。ここで相模は強がり、違う意見を出し、一時認められた。そこで自信や優越感を得ることはできた。しかし、その自信に繋がった霞にも最後は見捨てられてしまった。そして居場所を見失った居場所がなくなった人間は、自分の居場所を他人に教えてもらいたがる。自分で見つけられないなら他人に見出してもらおうとする。

つまり今はどこにいるのか見つけ出してほしいということだ。捜してほしいから見つかる場所にいる。学院内の目のつく場所だ。

さらにもう一点。  
その場所は一人でいられる場所だ。雑踏の中では見つけ出してはもらえない。自分の価値が平凡なものだとわかったら、集団で自身が霞むことも内心ではわかっているはずだからな。

どうしてそこまでわかるかって？ 純粋なころに俺もやったからさ。他人に認めて貰いたかったしな。五年も前だ。その間に俺はここまでのエリートぼっちになった。さて、この条件に当てはまる場所。この学校に来て間も

ないから詳しくない、というかほとんどわからん。どこだろうな。と、周りを見回す。

「・・・あれじゃねえのか？」

見上げたのは時計塔。俺はそこまで走り出す。これでかくれんぼはお終いだ。



エレベーターで最上階まで上がり、生徒会室に入り込む。するとやはり、相模はいた。テラスので黄昏ている。俺に気付いてこちらを振り向き、その表情は落胆する。あの文実と一緒にいたやつらや、リア充的な男子が来るとでも思っていたんだろう。

「エンディングセレモニーが始まるから戻れ。」

「別にうちがやらなくてもいいんじゃない？」

簡潔に用件だけを伝えたが、やつは背を向けて答えた。それは話を聞く意思がないことを示している。俺もよくやる。

「残念だが事情があつてな、そうも言つてられん。時間はないんだ。早くしてくれろと助かる。」

我ながら説得が下手すぎる。

「時間つて？もうセレモニー始まつてるんじゃないの？」

「ああ、本来ならな。でもどうにか時間を稼いでる。」

「ふーん、それって誰がやってるの？」

「桂とか三馬鹿とかだ。」

相模はそれを聞くと拳を力強く握った。

「そうなんだ・・・」

「わかつたら早く戻れ。」

「桂さんが代わりにやればいいじゃない、あのひと完璧超人だし。」

やはりな。また自分がやったことを桂たちにフォローされてる。その事実も相模を苛立たせるんだろう。が、俺も苛立ってきた。

「お前のもつてる賞の集計結果とかいろいろあんだよ。」  
「じゃあ集計結果だけ持つて行けばいいじゃない！」

それでは後悔するのはお前だ。いつまでも罪悪感と劣等感に苛まれるだけだ。霞が言ったように、お前も救われるべきなのだ。ここまで悪化させたのは、霞の悪意ともとれる悪戯心なのだから。

だから今俺はこいつを連れ戻し、委員長としての役割を果たさせ、委員長としての挫折をきっちり与える必要があるのだ。

そのためには、相模が望む人間に、相模が望むことを言わせればいい。ただ、残念ながら俺は望まれていない。今から人を呼ぶ時間もないし、もうどうしようもない。俺一人ではここで詰みだ。

と、そのとき生徒会室の戸が再び開く。相模と俺は振り返る。

「やはりここにいたんですね。捜しましたよ。」

扉から出て来たのは綾崎ハヤテ。その後ろには文実で相模にくっ付いていた二人だ。綾崎が連れてきたようだ。

「綾崎くん、それに二人とも……」

もしかして相模も綾崎にときめいてる？さすがときめきのプロ。俺のときは全然違う反応を示されてるね。

綾崎は相模に応えるように、一歩一歩近づいて行く。

「連絡が取れないそうで、心配しましたよ。動画研のカメラの映像を捜して、ここに来るのを見つけてくることのできたので。」

え、なにそのチート？俺は自分で考えたのに。

しかし、相模はまだ頑なだった。

「ごめん、でも……」

「早く戻りましょう？みなさん待ってますから。」

「そうだよ！」

「心配してるんだから！」

綾崎は知ってか知らずか、相模が望むような言葉を使い、説得しようとしている。三人がかりでの説得で相模の態度も軟化してはいるが、まだ足りない。

「でも、今更うちがもどったって……」

「そんなことないよ、みんな待ってるんだからさ！」

「一緒に行こ？」

友達同士、薄っぺらな友情を確かめあっているのを、俺と綾崎は見ている。綾崎の視線が一瞬時計を向いた。あいつもまた焦っているようだ。

「そうですよ、相模さん。相模さんのためにみんな頑張ってるんですから。」

綾崎も説得を再開。しかし相模が動く気配もなかった。

「けど、うち、みんなに迷惑かけちゃって、今更もどっても……」

動くのは時計のみ、もう時間はない。

ここから相模を動かすにはどうすればいい？綾崎は綾崎のやりかたでやっているし、結果はあれでも桂だってサポートしようと頑張ったんだろう。この友達たちだって、自分たちのやりかたで説得を試みている。



ならば俺は俺のやりかたを貫くしかないだろう。正々堂々真正面から卑屈に最低に陰湿に。

最底辺の人間同士のコミュニケーションとは？傷を舐め合うか、蹴落とし合うかだ。なら俺が取る方法は……相模をしつかりと見据える。

綾崎は相模を励まし、なんとか少しずつでも進めるように優しい言葉をかけている。

「大丈夫だから、戻ろう？」

「うち、最低……」

相模が自己嫌悪の言葉を吐く。タイミングはここだ。

今思ったけど、大丈夫って言葉を言うときの大丈夫じやなさは異常。はい、どうでもいいっすね。

「本当に最低だな。」

はあーっと深く、長い、苛立ちを込めた溜息を吐いてそう言う。

四人の視線は全て俺に集まる。

「相模、お前は結局ちやほやされたいだけなんだ。かま

ってほしくてそういうことやってんだろ？今だって『そんなことないよ』って言ってほしただけなんだろが。そんなやつ委員長として扱われなくて当然だ。本当に最低だ。」

「何言って……」

「みんな多分気付いてるぞ？お前のことなんてまるで理解してない俺がわかるくらいだ。」

「あんたなんかと一緒にしないでよ……」

「同じだよ。最底辺の世界の住民だ。」

ここまでは俺の主観でしかない。ただ相模を怒らせるだけだ。客観的事実の開陳によりことは動く。

「よく考えろよ。お前に全く興味がない俺が一番早くお前を見つけた。」

「つまり……誰も真剣にお前を捜してなかったってことだろ。」

相模の顔色が変わった。怒りが消え、代わりに絶望が現れる。

ここまですればあとは綾崎に任せられるだろ。

「わかってるんじゃないのか、自分がその程度の・・・がはっ！」

「比企谷さん少し黙っててもらえませんか？」

痛ってえ。綾崎に胸ぐらを掴まれ壁に叩きつけられた。なにこの馬鹿力。女子みたいな顔して行くせに。マジで痛い。余裕の態度を見せるために誤魔化したかったが本当に余裕なかった。

綾崎は自身の心を落ち着かせようと深呼吸した。そして相模に向き直る。相模の付き添いたちも言う。

「そんなやつほっとこうよ！行こ？」

綾崎は言う、俺に背を向けるようにして。

「早く戻りましょう。」

そして相模たちは戻って行った。すれ違い様に綾崎は呟いた。

「どうしてそんなやりかたでしか救えないんですか？」

それだけ言って去って行く。救う？そんなことはしていない。俺は傷付け、綾崎が救ったんだ。



エンディングセレモニー、結局相模の挨拶は散々だった。俺が戻ってきたときには、もう俺のしたことは広まっていた。

「文実の人集まってるー！」

みんなお疲れ様！事後処理とかまだあるけど、文化祭は大成功だったわ！」

桂が呼びだ。集まると桂は相模に話を振る。笑顔で。

「ほら、相模さんも文実に最後の挨拶よろしくね！」

「え、うち？」

「そうよ！」

相模は救われたんだらうか？この挨拶の態度でそれは少しわかるかもしれない。

「えと、たくさん迷惑かけちゃってすみませんでした。でも無事に終わってよかったです。・・・お疲れ様でした！」

「お疲れ様でした！」

相模はもちろん悔いているようすではあったが、自覚を持ち、責任をかんじ、自分の情けなさを悔いていた。それは今後の成長につながる前向きなものになるのではないだろうか？

俺に向けられる視線はというと、やはり嫌悪だろうが、忌み嫌われているとは感じなかった。そんな中、俺に話しかけてくる人物もまたいた。

「比企谷はどんな人でも救うのね。とても面白いやりかたで。」

霞だ。

「いや俺は罵詈雑言浴びせただけですし、救ったのは綾崎ですって。」

「でも今の状況で彼女がこれだけの迷惑をかけたのに責められていないのは、被害者になったからよ？」

「そこまで考えてませんって。ただあいつを一刻も早く動かそうとしただけです。」

「またまたご謙遜を。私も生徒会の仕事あるからまたね。」

俺はそんな持ち上げられることなんてしていない。糾弾され、弾かれるべき行動だったはずだ。

「比企谷くん。君は傷ついてないのか？」

次は春風が来た。

「ん、俺はこの程度じゃ傷つかんって。俺の精神は叩かれまくったからな、昔。鋼は叩いて鍛えるとか言うだろ？」

そーいや物理的ダメージは大きかったな。痛え。

「君はそうやって自分のことを勘定に入れずに行動できるんだね。君が傷つくのは嫌だけど、その君のなんて言

「だったらいいかわからない強さ、私は結構好きだよ。」

おい、やめろよ。バイトでのあれとかあるから知ってるけど、そういうこと気軽に言うもんじゃないよ。うっかり惚れちまうだろ！っーか自分を勘定に入れずとか俺、宮沢賢治なの？国語好きにとってはなんとなく嬉しいぜ！なんてな。

春風はそう言い残し去って行った。  
俺はその後の仕事はサボり、帰った。



翌日、普通の授業に戻った。

休み時間に本を読んでいると、一人の女子生徒が声をかけてきた。

「ねえ、ヒキタニくん。相模さんに酷いこと言ったって聞いたけど本当なの？どうしてそんなこと言ったの？」

おい、俺はヒキタニで通ってるのかよ。

しかしこの声音、俺を糾弾しているというよりは、哀れんでいるというほうが近い。

「いや、そりゃあいつが腹立ったから罵倒しただけだろ？」

「そうなの？綾崎さんに聞いたたら、ヒキタニくんは相模さんを動かすために頑張ったって言ってたけど。」

「なんだよ、そう聞いてんのか。だったらその理解でいいよ。」

「うん、だけどヒキタニくん。そんなことしてて悲しくなるでしょ？だから、気をつけてねって。」

「ああ、考えとく。」

俺は非常に驚いている。あんなことをしておいた俺が、弾劾されないなんて。事情を詳しく知ってるわけでもないのに、心配してくれるなんて。昨日感じた嫌悪の視線も、忌避ではなく哀れみ、心配だったのかもしれない。やはりこの学校は一般で言う理想的な人間が多く集まっていると思っただ。

「比企谷くんが思い描いている人間は、ただの空想なんだよ。良い人だっていっぱいいるさ。」

「ああ、そうだな。」

隣の春風に言われる。勝手に人間というものを全て決めつけていたのは俺だったのかもしれない。人間というものに対しての新たな問いを用意してみようかと思った。



その日の夜、俺は月を眺めていた。最近のできごとについて考えながら。

「比企谷さん……」

「綾崎か。」

この際だから綾崎とも話してみようと思った。

「お前って幸せ者だよな。誰からも好かれて、特に女子とか。」

「そんなことないですよ。女の子からなんて好かれませんし。ヒナギクさんなんていつも怒らせちゃって。それと、僕の特技は元氣と不幸ですから。」

そう言って苦笑いしている。や、桂のあれはツンデレって言うんだよ知らないの？

「あー、確かに不運ってのはよく聞くな。」

「よく言われますよ。」

またもや苦笑。

しかし綾崎との会話は長く続かなかった。

「ハーヤーテー！ちよつと来てくれ！」

「はい！今行きます！すみません比企谷さん、ではまた。」

我儘お嬢様に呼ばれてあいつは飛んで行った。

綾崎ハヤテ。とても優しく痛みも知り、周りのためだけに行動しているような人物。

そして自称不幸。

その人物は確かに不運かもしれない。借金もあれば、変な事故にもよく遭遇するらしいし。

しかし前も言ったが、不運と不幸はイコールじゃない。あれだけ人に好かれ、モテ、リア充で、毎日を楽しそうに過ごしている人間が不幸であるはずがない。

不幸だというのはただの先入観で、よく見れば、いやよ

く見なくてもとても幸せなやつなのである。  
だからあいつは不幸を名乗るべきではない。

やはり綾崎ハヤテの自称不幸は間違っている。



## 著者あとがき & メッセージ

### 【双剣士】

SS書きとしては2度目の参加になります双剣士です。挿絵はノーカンで。今回は泉ちゃんんの愛らしくも天然全開の言動に「おいおい」と読者からツッコミを入れてもらいたかったので、あえて外部の視点や心象描写を含ませず、セリフだけで構成してみました。拙作「落葉焚き」以来になる特殊形態でのコメディ小説になりましたが、楽しんでいただけたなら幸いです。

……べ、別にブランクのせいで地の文の書き方を忘れちゃったからじゃないんですからねっ!!

### 【彗星さん】

第五回合同本おめでとうございます。去年から始まったこの合同本企画も今回で五回目。その記念すべき五回目に参加することができ大変うれしい限りです。

私は第一回ぶりの参加ということで気合を入れてのぞんだ……はずだったので、気づけば締め切り当日。現在23時と大変ぎりぎりとなってしまいました。関係者（主に双剣士さん）の方々には大変ご迷惑をおかけしました。本当にすみません。

そして、肝心の内容の方も個人的にはもう少し頑張りたいところもあつたのですが、如何せん力不足で。まだまだ自分が未熟者であることを実感しました。これからも精進いたします。



そうそう。今回寄稿させていただいた小説を読むときに、水蓮寺ルカの「僕ら、駆け行く空へ」を聞きながら読むことをオススメします。私もこの曲を聴きながら頑張って書いておりました。

感想などもお聞かせくださると大変嬉しいので、ぜひぜひお暇なときにでもよろしく願いします。

次回以降もこの合同本が十回、十五回と続いていくこと、そして、ハヤテのごとく！アニメ第五期があることを祈って。

彗星

### 【みっちよさん】

こんにちは！はじめましての方は始めまして！みっちよです！

このたびは転載枠の「Future」で参加させていただきました！

この小説はヒナギクの誕生日記念に書かせて頂いた小説です！

一年前の小説を見返して修正を加えるのはちよつと恥ずかしいものがありますね(笑)

ある方からアドバイスを頂いたのでその方のアドバイスを参考にして修正させていただきました！

小説の内容につきましてはハヤテの結婚指輪を渡すシーンだけぱっと思いついたのでそこから肉付けしてあんな感じになりました(笑)

少しでも楽しんでいただけたなら幸いです!!

最後になりますがアドバイスをくださったデスさん、イラストを描いてくださったピーすけさん、企画して下さった双剣士さん、そして読んでくださった皆様に心からの感謝をこめて・・・

本当にありがとうございます！

## 【ピーすけさん】

窓に！ 窓に！

合同本も第五回。ようやく……ようやく執筆側として参加できました（泣）。

内容については、初めは夕暮れをテーマにした恋愛ものを描こうとしていたら、いつのまにかホラーもどきになってしまったというもの。……あるええ？

最初は、あまりにもハヤテっぽくなかったので最後の部分に無理やりそれっぽい内容を付与して無理やり（↑ここ重要）ギャグっぽく纏めました。

あと、みつちよさんの挿絵および表紙絵のイラストも描かせていただきました。

みつちよさんの可愛いヒナギクに見合う絵になったか、素敵な小説群に釣り合う表紙絵に出来たかは不安が残りますが、どうか生暖かく見てやってください。

それでは、ピーすけでした。

## 【羊田。ペンタさん】

どうも羊田。ペンタです。前回に引き続き今回はビンゴで運良く勝つことができたので参加させていただけることになりました。

今回の作品、やはり俺の青春ラブコメは間違っている。とのクロスとなりましたが、俺ガイルをご存知ではない方にとっては訳の分からない作品になってしまった気がするので申し訳ないです。今回書きたかったのは、八幡に、八幡の考えているようなものではないものがあるということについて納得させたかったということです。あと一つ、タイトル通り、ハヤテの自称不幸は間違っていると言いたかっただけです(笑) 思い返してみればこの作品、創作性が非常に低いです。そのくせキャラのぶれは大きい。そんな作品でしたが、いかがでしたでしょうか？もし面白いと思っただけなら、今回は特に、原作者へ感謝したいと思えます。最後になりますが、読者の皆様、企画してくださった双剣士さんにありがとうございます。

## 編集後記

今回の合同本はマジで肝を冷やしました。

第4回の「締め切り一週間前の時点で新作枠ゼロ」というのも大概でしたけど、今回も一週間前の時点で原稿の半数が未到着であり、しかも締め切りの90分前まで追加投稿は皆無。「クイズでなく運ゲーでの選出なので名誉が伴わない」「運ゲーなので勝つ気のなかった上位者が含まれてる可能性大」といった悪い要素が重なっていることもあり、この企画自体が飽きられたのかなと悪い想像ばかりしていました。結果として六名中一名が脱落という残念な結果になりましたけど、この程度で済んで安堵しているくらいです。張り切って原稿と表紙と挿絵をトリプル投稿してくれたピーすけさんの尽力が無駄にならなくて本当に良かった！

次回の合同本企画はハヤヒナ合同本の公開が終わった頃、8月後半ごろを予定しています。やはり完全な運ゲーというのは執筆者のモチベーションに疑問符が付くようなので、クイズ以外のなんらかの方法で「苦勞して勝ち抜いた達成感」を得られるような選出方法を考えるつもりです。

なお、七月に実施する当サイト初の絵描きさん育成企画「へっぼこGALLERY」の卒業記念として、合同イラスト本の企画も深く静かに進行しています。ハヤヒナ合同本やワイ杯クイズ大会なども加わって、今年の止まり木はイベント盛り沢山の熱い熱い夏（意図的誤字）になりそうです。皆さん、資源の備蓄は十分に！

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.05

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2014年6月15日

